外国語活動の効果的な指導に関する実証的研究
－『英語ノート』及びICT教材を活用した授業モデルの構築－

小学校外国語活動研究チーム

【要旨】平成23年度から完全実施となる小学校外国語活動の円滑な導入を目指し，昨年度の研究の成果と課題に基づき，学級担任による単独指導の授業モデルを構築し，その効果を実証した。具体的には，『英語ノート』及び『英語ノート』デジタル版を効果的に活用するための補助教材「実写版 ALT 動画」や聞く活動を充実させる「音読教材」等の開発を行うとともに，中学校との接続を考えた文字導入（文字提示及び文字に慣れ親しませる活動）について研究を行った。

【キーワード】『英語ノート』，『英語ノート』デジタル版，学級担任による単独指導，実写版 ALT 動画，「聞く」・「話す」活動，文字導入，評価，中学校との接続

チームメンバー

和歌山県教育センター学びの丘研修員

串本町立潮岬小学校	教　諭	武部　友昭	
白浜町立椿小学校	教　諭	三栖　靖敏	
京都外国語大学	教　授	石川　保茂	
帝塚山学院大学	専任講師	近藤　睦美	
和歌山県教育センター学びの丘			
基本研修課長		向井　忠晴	
教育指導課	指導主事	三角　雅彦	
基本研修課	指導主事	赤井　祥子	
専門研修課	指導主事	喜多　恭子	
○専門研修課	指導主事	辻岡　直樹	○印･･･チーフ

研究協力者

串本町教育委員会
　指導主事　山本　隆介
串本町立潮岬小学校
　教　諭　中地　強
串本町立潮岬小学校
　教　諭　尾原　佑紀
白浜町教育委員会
　指導主事　十河　崇
白浜町立椿小学校
　教　諭　宮本　憲一
白浜町立西富田小学校
　教　諭　小森　千津子
白浜町立西富田小学校
　教　諭　遠藤　隼人

研究支援者

田辺市教育委員会
　外国語指導助手　Cynthia Alice White

【目次】

１　研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
（１）外国語活動導入の経緯と課題
（２）平成20年度和歌山県教育センター学びの丘指定研究「外国語活動」に係る研究成果と課題
（３）平成21年度の外国語活動実施状況

２　児童と指導者（学級担任）における外国語（英語）活動へのニーズと課題・・・・・ 2
（１）児童のニーズ
（２）指導者（学級担任）のニーズと課題

３　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（１）ICT 教材「実写版 ALT 動画」の開発について
（２）「聞く」・「話す」活動の充実について
（３）文字の効果的な導入について
（４）評価の方法について

４　研究の実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
（１）概要
（２）授業展開
（３）教材・教具
（４）開発した ICT 教材の操作方法
（５）学習指導案
（６）検証データ

５　研究の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

－研究の内容について－
（１）ICT 教材「実写版 ALT 動画」の開発について
（２）「聞く」・「話す」活動の充実について
（３）文字の効果的な導入について
（４）評価の方法について

－授業モデルについて－

－児童のリスニング能力及び語彙技能習得における効果について－

６　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
（１）児童におけるコミュニケーション能力の素地育成について
（２）指導者におけるデジタル版及び ICT 教材の活用について
（３）継続研究における成果と課題について

〈本稿及び関連資料は，和歌山県教育センター学びの丘 web ページ 研究紀要（H21）に掲載しています。〉

１　研究の背景

（１）外国語活動導入の経緯と課題

平成14年度から総合的な学習の時間等における国際理解に関する学習の一環として英語活動が全国的に取り組まれてきた（平成19年度の全国の公立小学校での実施状況97.1％。本県では平成17年度以降は全ての小学校で実施）。しかしながら，総合的な学習の時間等の目標や内容については各学校が定めて実施することから，英語活動の内容や授業時数には相当なばらつきがあった。平成20年3月に改訂された小学校学習指導要領では，小学校外国語活動の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点をもとに，国は各学校において共通に指導する内容を示す必要があるとして，平成23年度から第５学年及び第６学年で年間35時間程度の外国語活動を実施することとした。しかし，年間35時間（週１単位時間程度）実施となれば，毎回の授業においてALT等を確保してのティーム・ティーチング（以下，T･T）を中心とした授業の実施は困難となる場合が多くなると考える。また，全国都道府県教育長会議の2008年度研究報告書「新学習指導要領の趣旨の徹底に向けた取組と小学校段階における外国語活動の必修化への取組について」においても，「外国語活動」（英語教育）に対して，一般の小学校教員の８割以上が学級担任として単独で指導することに不安を抱えているという調査結果が発表されている。学級担任による単独指導を含め，多くの学級担任が抱える指導の在り方や教材作成，さらには自らの英語運用に係る不安や負担を軽減するため，実践的な授業モデルの構築を図り，その成果を普及することは喫緊の課題である。

（２）平成20年度和歌山県教育センター学びの丘指定研究「外国語活動」に係る研究成果と課題

上記の経緯と課題を踏まえ，平成20年度の和歌山県教育センター学びの丘指定研究においては，指導者の不安や負担を軽減すること，また，中学校との円滑な接続や，英語を読みたい，書きたいという児童のニーズに対応することを目的に，下記の研究仮説を設定し，『英語ノート』試作版に基づくオリジナル ICT 教材を用いた実証的研究を行った。

『英語ノート』に基づいた ICT 教材を活用し，ALT とのティーム・ティーチングに近い授業形態を創出すれば，学級担任の指導及び英語に関する不安や負担が軽減され，児童は「外国語活動」の目標に則した活動が行える。

研究成果として，設計・開発したオリジナルICT教材を活用することにより，ALTとの T･T に近い授業形態を創出することが可能となり，上記の課題に対して有効な手立てとなることが検証された。また，会話調英文を見ながら聞いてまねる音読活動と，音声と単語のマッチングゲームや文字をなぞるなどの電子ペンマンシップ活動を行った。これらの文字を導入した活動は，児童の英語を読みたい，書きたいという意欲を向上させた。中でも，文字の提示は音声理解の補助となることがわかった。しかしながら，『英語ノート』の内容に，研究に関する内容を加えたことにより，取り扱う学習内容・学習量が多くなりすぎたこと，音読活動において扱う単語や文の難度が高く，理解度が低くなってしまったことなどの課題も残された。（『平成20年度和歌山県教育センター学びの丘研修員研究紀要』web ページ　http://ｗｗｗ. wakayama-edc. big-u. jp/kenkyukiyo20/kenkyukiyo_top. htm 参照）

（３）平成21年度の外国語活動実施状況

移行期間初年度の実施状況については，全国公立小学校の約98％が外国語活動の実施を計画し，そのうち約58％は年間35時間またはそれ以上の授業を実施する計画である（文部科学省「平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について（速報）」より）。本県については，公立小学校の約78％で35時間以上の実施を計画している。

また，『英語ノート１・２』，付属音声 CD，『英語ノート１・２指導資料』（以下，『指導資料』），『英語ノート』デジタル版（以下，デジタル版）が共通教材として，使用希望調査で希望した学校の第５・６学年の全ての児童及び学校に配付され，各学校での実践が始まっている。

２　児童と指導者（学級担任）における外国語（英語）活動へのニーズと課題

平成20年度の研究を開始した時点では，『英語ノート』試作版が全国の「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校にのみ配付された状況であったが，平成21年度は先述のとおり希望調査に基づいてすべての児童及び学校に『英語ノート』等の共通教材が配付され，それらを活用した外国語活動が実施されている。こういった状況の変化を踏まえ児童や指導者における外国語（英語）活動へのニーズと課題を分析するために下記のアンケート調査を実施した。

（１）児童のニーズ

ア　アンケート調査

研究協力校３校の第５・６学年児童114名を対象に，英語学習に対する関心と英語活動でやってみたいことに関する12の質問項目について，「はい」「どちらでもない」「いいえ」の３段階のリカート・スケール（注１）（評定尺度）を用いて調査し，評定計算を行った。

イ　調査結果

図１は，英語の４技能（読む，書く，聞く，話す）に関する４つの質問項目の調査結果をグラフ化したものである。４技能に関するすべての質問項目において，高い数値を示していることから，児童の多くは４技能すべてを身につけたいと考えていることがわかった。これは，平成20年度の調査とほぼ同様の結果となっている。

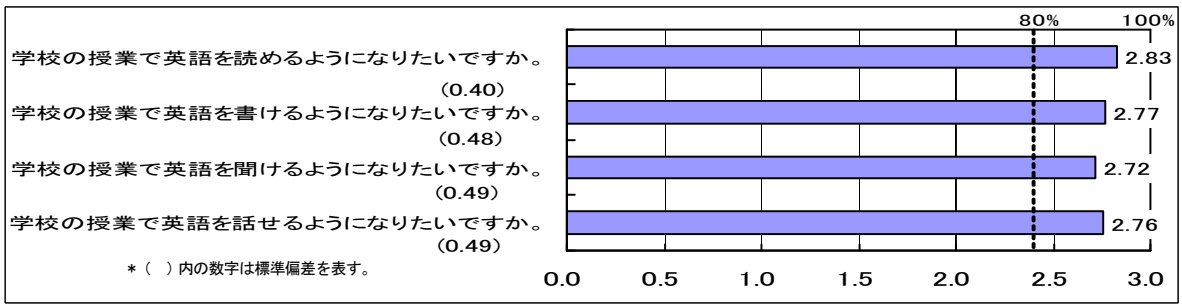


図１　英語の４技能に関するニーズ調査結果　３段階のリカート・スケールを100%に換算した場合，縦破線は80%を示す。

（２）指導者（学級担任）のニーズと課題

ア　アンケート調査

研究協力校が所在する串本町及び白浜町の小学校教員168名を対象に，外国語活動実施状況及び指導者のニーズに関する12の質問項目（記述回答含む）についてアンケート調査を実施した。

イ　調査結果

ここでは，12の質問項目のうち，共通教材や授業実践に関するものを取り上げ，その結果を示す。

（ア）質問項目から

◆〔２〕２）「『英語ノート』があることで，以前の英語活動より不安が軽減されると感じますか」

（注１）３段階のリカート・スケールの数値は，質問に対する回答を，「はい」３点，「どちらでもない」２点，「いいえ」１点とし，各項目の平均点を算出したものである。リカート・スケールを%に換算した場合，3.0は100%を示す。本研究では，「事後アンケート」，「ふりかえりカード」の結果をリカート・スケールで表す。

◆〔２〕３）「『英語ノート指導資料』は，学級担任が外国語活動を行う上で，十分な資料であると思いますか」

◆〔２〕４）「外国語活動を導入するにあたって（先行実施の場合，導入にあたり）教員はどのように感じていますか」

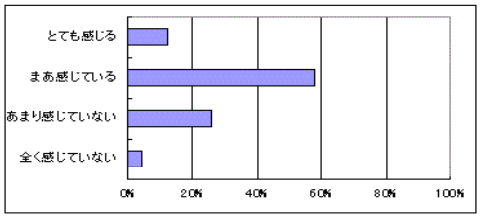


図２　質問項目〔２〕２）の結果

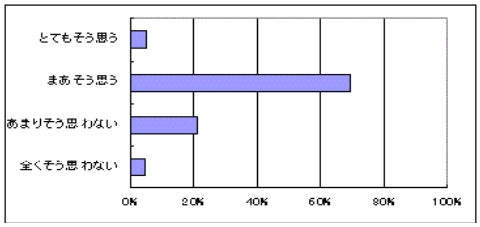


図３　質問項目〔２〕３）の結果

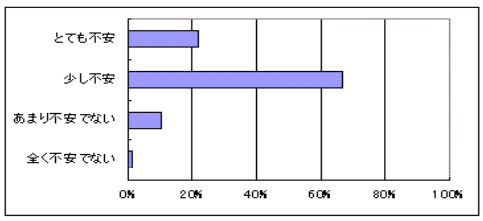


図４　質問項目〔２〕４）の結果

図２に示す質問項目〔２〕２）に対しては，約70％が「とても感じる」「まあ感じている」と回答し，**図３**に示す質問項目〔2〕3）に対しては，約74％が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答している。このことから，『英語ノート』などの共通教材や『指導資料』が配付されたことにより指導者の不安がある程度軽減されたことがわかる。

しかし，**図４**に示す質問項目〔2〕4）に対しては，約89％が「とても不安」「少し不安」と回答していることから，外国語活動の授業実践に依然として不安を感じている指導者が多いことがわかる。

また，**図５**は，質問項目〔１〕２）「英語教育を行ううえで，とくに課題だと感じていることは何ですか。貴校で課題として感じていることを３つ選び，ご記入ください」の集計結果をグラフ化し，選択者数の多い順に並べ替えたものである。

この結果からは，ICT 教材を含む教材に関することや英語指導に関する知識やスキル，教員の英語力に関することに課題を感じている教員が多いことがわかる。

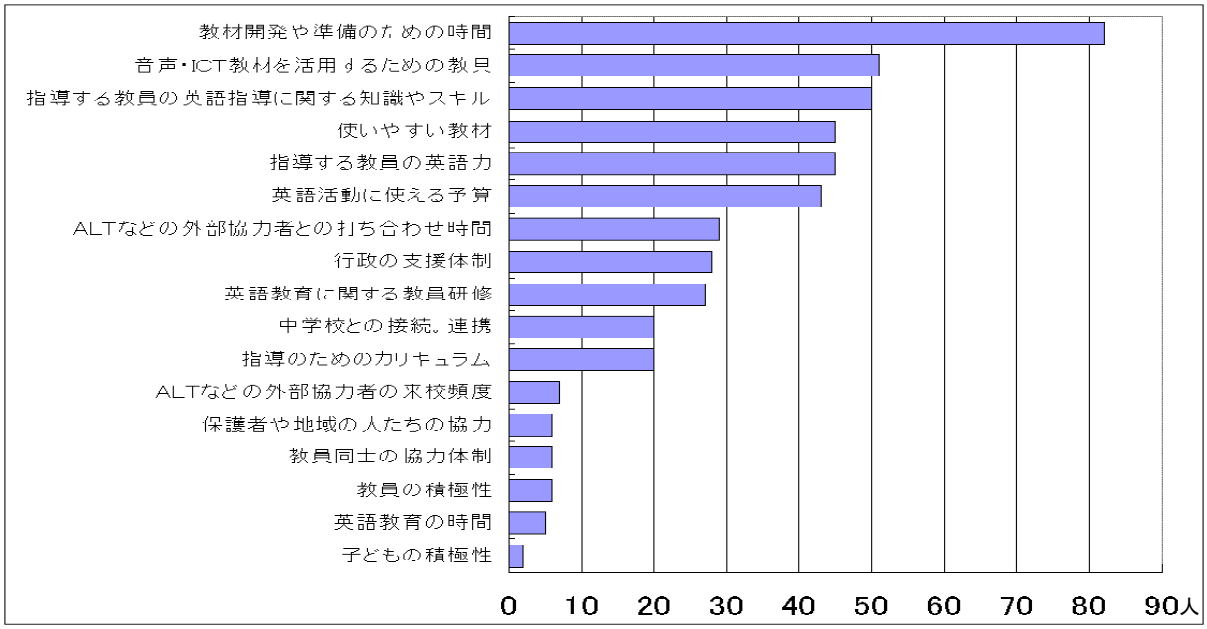


図５　質問項目〔１〕２）の結果

（イ）記述回答から

◆〔２〕９）「スムーズに外国語活動を導入するうえで，今必要と感じるもの・こと（ニーズ）は何ですか」では，次のような意見が見られた。

・補助教材や教具の充実を早急に進める必要がある。

・評価の仕方についての具体例を示してほしい。
・自分自身が英語で会話をしたり，聞き取ったりすることに不安があるため，英語力をつけなくてはならない。
・指導の仕方やどのように授業を行っていけばよいか具体的に知りたい。
・全授業を ALT に頼るわけにいかず，HRT だけでどのように指導していけばよいかを示してほしい。

ウ　考察

指導者（学級担任）のニーズをまとめ，昨年度の調査と比較すると以下のようになる。

表１　平成20,21年度の教員ニーズ

平成20年度		平成21年度
①学習目標の提示		①教材開発や準備のための時間
②目標達成のためのパターン（指導案）提示	⇨	②児童がより楽しく学べる教材の開発
③道具（教具）の種類と使用方法の提示		③英語指導に関する知識やスキルの提示
④教員に求められる英語力の提示		④ALT の来校回数の増加
⑤評価の規準と方法の提示		⑤電子黒板等の視聴覚機器の充実

表１を見ると平成20年度のニーズ①②③⑤については『英語ノート』や『指導資料』等の配付により，ある程度解決されたものと考えられる。しかし，今年度から移行期間に入り，各校で取組が行われるなかで，ニーズがより具体的になっていることが見て取れる。実際に授業を行う学級担任にとっては，準備の時間を始めとして，『英語ノート』をどのように活用し，指導すればよいかやデジタル版を効果的に使用できる ICT 機器の設置に対するニーズが高い。また T･T を行うための ALT の確保が課題となっている。

これらのことから指導者のニーズと課題について以下のようにまとめることができる。

・『英語ノート』及びデジタル版が配付され，目標や学習指導案についての課題はある程度解決したものの，実際に授業を行うための教具や準備のための時間が課題となっている。
・具体的な指導の内容や方法，教材を示してほしいというニーズが高い。
・ALT との T･T を基本とする外国語活動において，学級担任が単独で行う指導に不安を感じている教員が多い。

３　研究の内容

平成23年度から完全実施となる外国語活動を円滑に導入していくためには，外国語活動の理念や目標について共通理解の幅を広げるとともに，『英語ノート』等，共通教材や ICT 機器等の教具を活用した具体的な授業モデルを提示し，指導者が授業の準備と実践のイメージを持てるようにすることが求められている。よりよい授業モデルを構築するためには，児童及び指導者のニーズや課題に対応することや中学校との円滑な接続についての方策を検討することが重要であると考える（**図６**）。

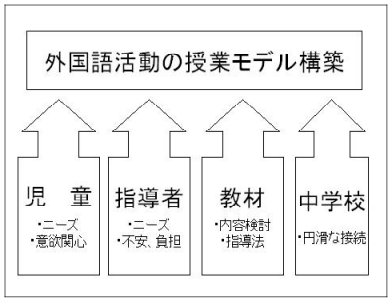


図６　授業モデル構築図

本研究では，先述の「**１　研究の背景**」と「**２　児童と指導者（学級担任）における外国語（英語）活動へのニーズと課題**」を踏まえ，外国語活動導入における課題を次の４点とした。

◇学級担任主導（単独での指導を含む）による具体的な授業実践のイメージが持てる授業モデルを提示すること。
◇「聞く」活動の充実を図り，児童の自然な発話につなげること。
◇児童の英語の４技能に関するニーズへの対応及び中学校での英語学習への接続の観点から文字を扱った活動を取り入れること。
◇コミュニケーション能力の素地の育成に沿った活動内容や指導方法及び評価の方法を

具現化すること。

これらの課題を解決するため，以下の４点を研究内容に設定し，授業モデルを構築することとした。

（１）ICT 教材「実写版 ALT 動画」の開発について
（２）「聞く」・「話す」活動の充実について
（３）文字の効果的な導入について
（４）評価の方法について

（１）ICT教材「実写版ALT動画」の開発について

『英語ノート』は学習指導要領の目標・内容に則して作成されている。今後，多くの学校において中心的な教材として用いられ，この教材に基づいて，学級担任が指導計画を作成し実施すると考える。

しかしながら，これまでの英語活動において ALT 主導で授業を行ってきた学校の場合，『指導資料』等があっても学級担任主導で授業を行うイメージがつかみづらく，学級担任の役割や英語での指示や発問にとまどうことも多くなることが考えられる。また，教員のニーズ調査結果にも見られたように ALT の来校回数が少なく，学級担任が単独で授業を行わなければならない場合もあり，このことは学級担任の大きな不安の１つになっていると考える。

『英語ノート』と同時に配付されたデジタル版には，音声・動画・イラスト等，様々な内容が組み込まれており，これを活用することで上記の課題解決に対して一定の効果があると考える。しかし，学級担任にとっては，現段階において，このデジタル版だけで授業を行うことは難しく，英語でアクティビティの説明やデモンストレーションを行い，進行を補助してくれる ALT の役割が欠かせないものとなっていると考える。

そこで，本研究では，T･T に近い授業形態を創出するため，昨年度のオリジナル ICT 教材開発にあたって登場させたアニメーション ALT を改良し，「実写版 ALT 動画」を作成し，教材として活用することとした。これにより，学級担任主導で行う授業イメージや学級担任の役割をつかむこと，さらには英語での指示等を練習することができるとともに，学級担任単独での授業も効果的に進められると考えた。

ア　学級担任とALTによるT･Tに近い環境を創出する効果

「実写版 ALT 動画」は『指導資料』の授業展開に基づき「アクティビティの説明」「デモンストレーション」「終わりの挨拶」の場面を中心に作成した（**図７**）。

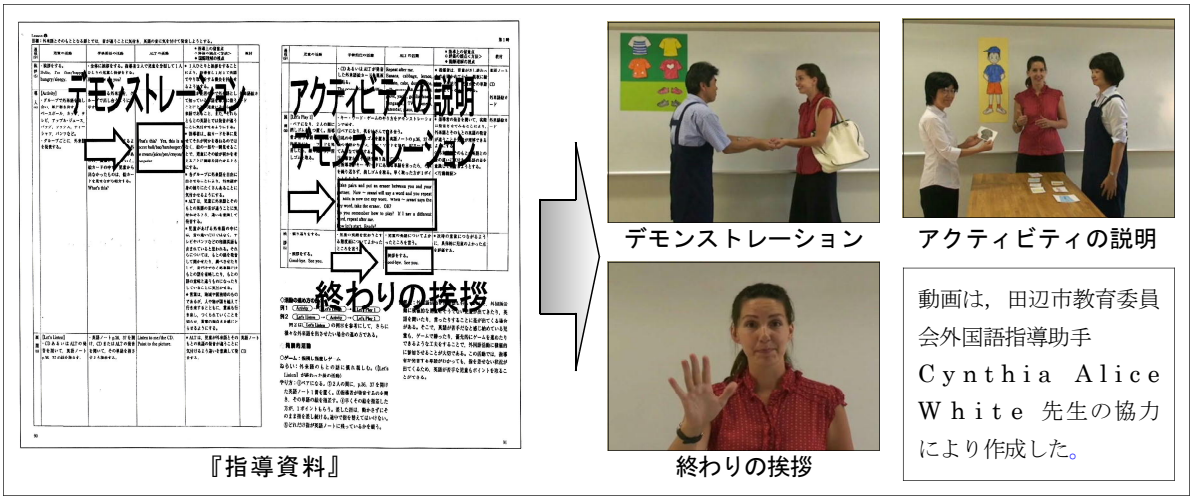


図７　「実写版ALT動画」作成場面

「実写版 ALT 動画」を活用することができれば，次頁**図８**に示す授業形態を創出できると考える。これにより，学級担任が単独で指導する際にも，指導の負担を

軽減し，円滑な授業展開を行うことができるとともに，児童とともに学ぶ「学習者のモデル」として指導にあたることができると考えた。

また，これを用いて授業を行うことで，学級担任主導で行う外国語活動の授業イメージをつかむとともに，ALT との T･T による授業での学級担任の役割や英語での指示等を学ぶことができると考えた。

なお，教材作成にあたっては，デジタル版との併用を考え，コンテンツを容易に一括操作できるように工夫した（p. 10 **図16**参照）。

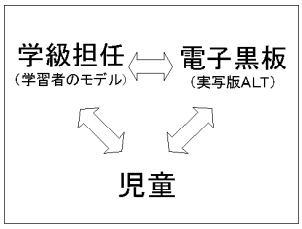


図８ 授業形態

イ　コミュニケーション能力に係る効果

先述の効果に加え，「実写版 ALT 動画」の活用により，児童がネイティブ・スピーカー（以下，ネイティブ）の発音を聞く機会が多くなる。また，昨年度の研究で開発したオリジナル ICT 教材におけるアニメーション ALT と比べ，児童が実写版 ALT の口の動きに注目して発音したり，コミュニケーションに必要な表情やジェスチャー等を学んだりすることができると考えた。さらに，実写による ALT の登場は，児童の興味・関心を高め，外国人に対して親しみを持たせることにも効果があると考えた。

（２）「聞く」・「話す」活動の充実について

デジタル版には，ネイティブの音声による「Let's　Listen」が組み込まれ，これがまとまった英文を「聞く」活動の中心となっている。しかし，岡・金森が「『英語ノート』および『英語ノート指導資料』を見る限り，想定されている音声に慣れるための「聞く活動」は，必ずしも十分とは言えず，早い段階での発話を想定しているようです。(※１)」と述べているように，児童の発話に至るまでの「聞く」活動については飽きさせずたっぷりと行う必要があると考える。

そこで，本研究では，『英語ノート』で扱われている内容に加え，より多くネイティブの発音を聞いたり，まねたりする活動を充実させるとともに，児童の「聞きたい」「話したい」というニーズに対応することをねらいとして「音読活動(注２)」(「読み聞かせ」「シャドーイング」(注３)) を取り入れた。なお，本研究では，まずしっかり「聞く」態度を身につけるため「読み聞かせ」を行い，続いて聞いた音をまねて発話する「シャドーイング」を段階的に実施した。

昨年度の研究からの改善点として，①各単元(４時間) ごとに１つの物語を用いたこと，②実施時間を授業導入時に設定し，毎時間取り組めるようにしたことの２点があげられる。

以下に，教材作成や指導の際の留意点を述べる。

ア　読み聞かせ

本研究における音読活動では，プレゼンテーションソフトを用い，電子黒板上で絵を提示できる ICT 教材を開発し，英語による物語の「読み聞かせ」を行った（**図９**）。開発にあたっては，以下の点に留意した。

・教材の選定について

児童が聞こえた英語や絵から話の内容を推測しやすくするため，児童になじみのある昔話や童話を用いた。

・英語表現について

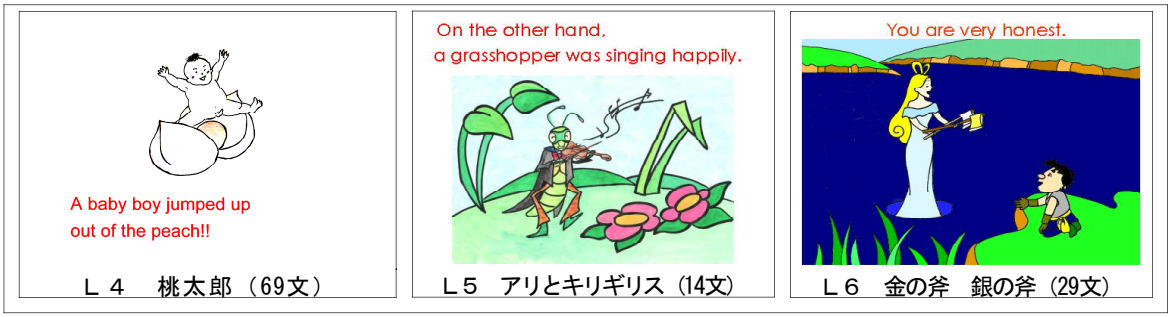
（注２）音読とは，声に出して読むことであるが，本研究では，外国語活動の目標2-(1)外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむことに基づき，英語で昔話等を「聞き」，その文中のセンテンスを声に出して「読む」（シャドーイング）ことを合わせて「音読活動」としている。

（注３）シャドーイングとは，一般的にテキストを見ないで聞こえてくるスピーチを聞くそばから，影（shadow）のように後から追いかけて口頭で再生していく英語の学習法の一つであり，ネイティブの発話，リズム，イントネーション等を身につけていく効果が期待できる。本研究では，英語の音声の特徴（リズム，イントネーション，アクセント等）に慣れ親しませることをねらいに，文字を提示した上で聞こえた音をまねて発話する活動を「シャドーイング」としている。

扱う単語やセンテンスの難度を考え，なるべく『英語ノート』で扱われた表現や短いセンテンスを用いた。

・指導の際の留意点について

一文一文を日本語に訳すのではなく，指導者による簡単な場面説明や指導者の発問により絵に描かれている情報を引き出しながら，聞こえてくる英語の意味を理解させるようにした。



Ｌ４　桃太郎（69文）　Ｌ５　アリとキリギリス（14文）　Ｌ６　金の斧　銀の斧（29文）

図９　読み聞かせ教材の一場面

イ　シャドーイング

音読教材の中に出てくるセンテンスの中から発話につなげたいものを１～２文取り上げて実施した。実施にあたっては，発音の上手下手ではなく，少しでも発話できたことや英語と日本語の音声の違いなどの「気づき」を評価することで，児童が意欲的に取り組めるように留意した。

（３）文字の効果的な導入について

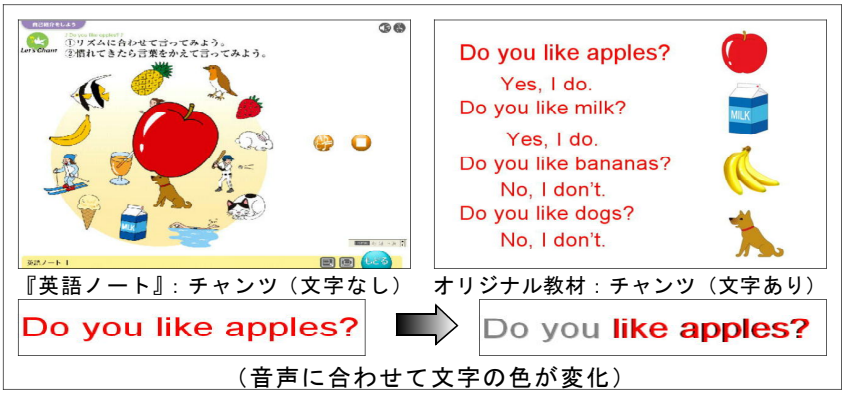
外国語活動においては，英語に慣れ親しませながら「コミュニケーション能力の素地を養うこと」を目標としていることから，「聞く」活動をじっくり行い，文字は触れる程度にとどめている。実際『英語ノート』では，豊富なイラストや活動用のワークシートが中心となっており，英文の提示はほとんどなく，デジタル版にも英文の提示は組み込まれていない。

しかし，先述の児童のニーズ調査結果においても，小学校高学年児童の多くが文字を「書く」ことや「読む」ことに高い関心を持っていること，また，昨年度の研究から，音声を中心としたチャンツや音読活動時に文字を提示することが音声理解の補助となっていること，中学校での英語学習との円滑な接続という観点から，今年度配付されたデジタル版に対応した文字導入を研究する必要があると考えた。

今年度は，音読活動での文字提示の他，以下の２つの活動の際に文字を導入し，児童に一定の負荷を与えつつも過度の負担にならない文字導入の方法について，検証授業を通して考察を行うこととした。

ア　チャンツ

デジタル版のチャンツをもとに，絵や音声とともに文字を提示するICT教材を作成し，効果を測ることとした。教材の開発にあたっては，発音される音声を認識しやすくするため，カラオケの画面をヒントに，文



『英語ノート』：チャンツ（文字なし）　オリジナル教材：チャンツ（文字あり）

（音声に合わせて文字の色が変化）

図10　開発したICT教材（チャンツ）

字部分の色が音声に合わせて変化するように工夫した（**図10**）。

検証授業では，文字を提示することで児童が発話のタイミングをとったり，音声理解の補助となる効果を確認するとともに，文字提示に対する児童の興味や関心について行動観察を中心に調査を行った。

イ　ペンマンシップ（注４）

児童の「書きたい」といったニーズに対応するとともに中学校での英語学習との円滑な接続を考慮し，「書く」活動をどのように導入していけばよいかを考察するため実施した。

活動においては『英語ノート』で扱われている単語を使い作成したワークシートを用いた。（**図11**）。また，指導については，まず学級担任と一緒に単語を「なぞる」場面を設定したり，少ない文字数の単語から扱う等，児童の負担に配慮しつつ，興味・関心を高められるように留意した。

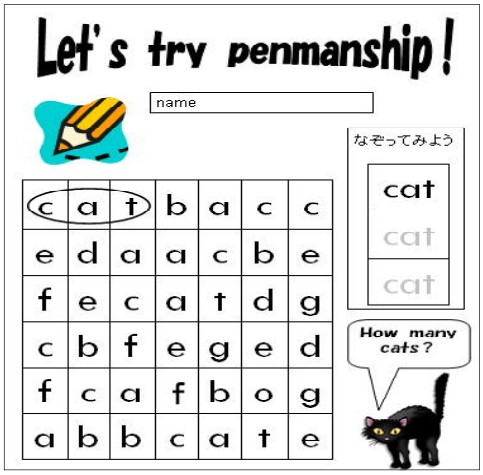


図11 ワークシート

（４）評価の方法について

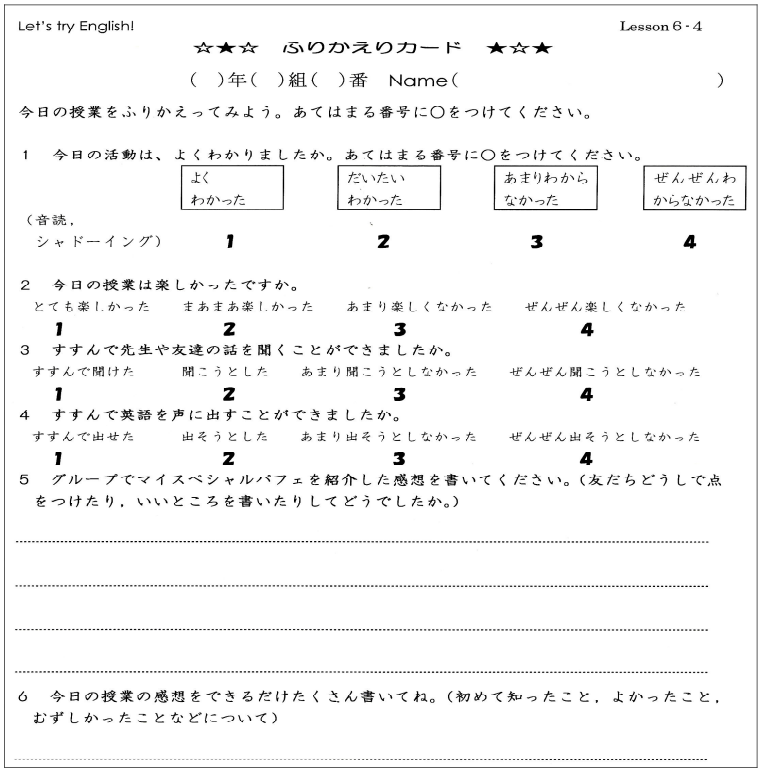
評価については，次の３つの方法を用いて実施した。

ア　児童による自己評価「ふりかえりカード」

「ふりかえりカード」（**図12**）の効果として，児童は感想等を記入することで，意識的に自己評価を行うことが期待できる。さらに，自己評価を行うことで，上達したこと，できるようになったこと等を把握し，今後の目標へとつなげることができる。また，「ふりかえりカード」をワークシート等とともにポートフォリオとして残し，授業を重ねる中で自己の変容を見ることができる。

学級担任はカードを量的及び質的に分析することで，自らの授業展開や指導方法を振り返るとともに，児童の学びの様子や変化を把握し，授業評価につなげることができると考える。

また，本研究では，この「ふりかえりカード」の評価をリカート・スケールで分析した結果をもとに研究内容の成果及び課題について検証した。


Let's try English!　Lesson 6 - 4

☆★☆　ふりかえりカード　★☆★

（　）年（　）組（　）番　Name（　　）

今日の授業をふりかえってみよう。あてはまる番号に○をつけてください。

1　今日の活動は、よくわかりましたか。あてはまる番号に○をつけてください。

よく わかった	だいたい わかった	あまりわから なかった	ぜんぜんわ からなかった
1	2	3	4

（音読，シャドーイング）

2　今日の授業は楽しかったですか。

とても楽しかった　1　まあまあ楽しかった　2　あまり楽しくなかった　3　ぜんぜん楽しくなかった　4

3　すすんで先生や友達の話を聞くことができましたか。

すすんで聞けた　1　聞こうとした　2　あまり聞こうとしなかった　3　ぜんぜん聞こうとしなかった　4

4　すすんで英語を声に出すことができましたか。

すすんで出せた　1　出そうとした　2　あまり出そうとしなかった　3　ぜんぜん出そうとしなかった　4

5　グループでマイスペシャルバフェを紹介した感想を書いてください。（友だちどうしで点をつけたり，いいところを書いたりしてどうでしたか。）

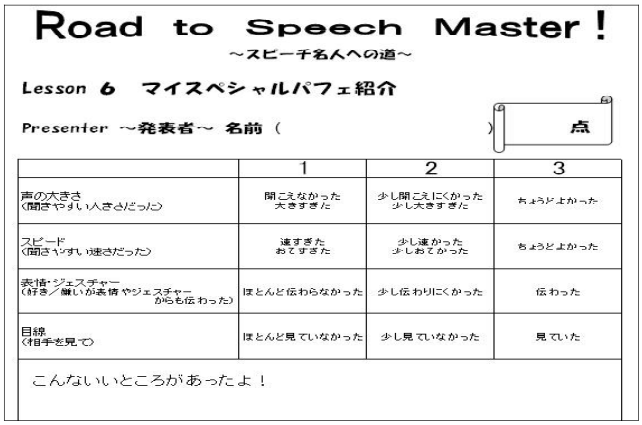
6　今日の授業の感想をできるだけたくさん書いてね。（初めて知ったこと，よかったこと，むずしかったことなどについて）

図12　ふりかえりカード

（注４）本研究におけるペンマンシップは，『英語ノート』で用いられた単語を「なぞる」ことや「単語さがしゲーム」を通して，文字の形や単語に慣れ親しむ活動とする。

イ　児童による相互評価「スピーチ名人への道」

各単元の最終時のグループ活動場面（好きなもの紹介やショー・アンド・テル等）で相互評価カード（**図13**）を用いて実施することを計画した。児童同士が相互評価を行うことにより，お互いの良いところに気づき，褒め合ったり，認め合ったりすることを通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されることをねらいとした。



Road to Speech Master！

～スピーチ名人への道～

Lesson 6　マイスペシャルパフェ紹介

Presenter ～発表者～ 名前（　　）　点

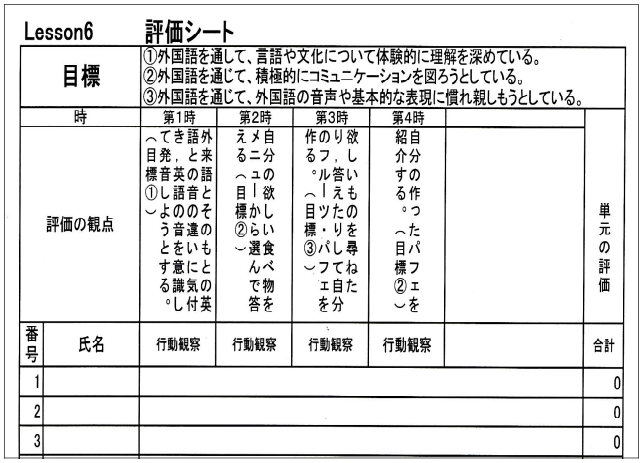
	1	2	3
声の大きさ（聞きやすい大きさだった）	聞こえなかった 大きすぎた	少し聞こえにくかった 少し大きすぎた	ちょうどよかった
スピード（聞きやすい速さだった）	速すぎた おそすぎた	少し速かった 少しおそかった	ちょうどよかった
表情・ジェスチャー（好き／嫌いが表情やジェスチャーからも伝わった）	ほとんど伝わらなかった	少し伝わりにくかった	伝わった
目線（相手を見て）	ほとんど見ていなかった	少し見ていなかった	見ていた

こんないいところがあったよ！

図13　相互評価カード

ウ　指導者による評価

外国語活動の目標に則して，各時間に評価規準を設定し，３段階の評価基準を設け，評価シート（**図14**）を作成した。その評価は，指導者による行動観察，発表観察,『英語ノート』の点検，「ふりかえりカード」等で行い，児童の気づきやがんばりの様子等，みとったことは，メモ欄に記入できるようになっている。これらは，各単元ごとに１枚のシートになっており，本研究では３単元分，３枚の評価シートによるポートフォリオ作成を計画した。



Lesson6　評価シート

目標	①外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深めている。 ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。 ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しもうとしている。					
時	第1時	第2時	第3時	第4時		単元の評価
評価の観点	へてき語外 目発，と来 標音英の語 ①し語音と ～よののそ う音違の とをいも す意にとる識気の °し付英	えメ自 るニ分 へュの 目｜欲 標かし ②らい ～選食 んべで物 答を	作のり欲 るフ，し °ル答い へ｜えも 目ツたの 標・りを ③パし尋 ～フてね ェ自たを分	紹自 介分 すの る作 °つ へた 目パ 標フ ②ェ ～を		
番号	氏名	行動観察	行動観察	行動観察	行動観察	合計
1						0
2						0
3						0

図14　評価（みとり）シート

４　研究の実践

（１）概要

ア　研究実践のプロセス

研究実践における教材開発，学習指導案の検討等のプロセスを**表２**に示す。

表２　教材開発，学習指導案作成の「３ STEPS」

STEP１	単元計画及び毎時間の指導案の作成，オリジナルICT教材及び音読教材の設計・開発
STEP２	指導者（学級担任）との指導方法や教材等について事前協議の後，検証授業を実施
STEP３	授業後，指導方法や教材等について研究協議を実施し，改善事項を次時に反映

イ　検証授業実施状況

検証授業については，研究協力校３校５クラスで実施した（**表３**）。授業については，研修員２名及び各クラス学級担任５名の計７名が行った。また，授業はT・Tではなく学級担任が単独で実施した。

表３　検証授業実施状況

実施校	白浜町立椿小学校	白浜町立西富田小学校	串本町立潮岬小学校
指導時数	全12時間		
対象学年・クラス数	第５・６学年 １クラス（複式）	第５学年 ２クラス	第５学年１クラス 第６学年１クラス
児童数	13名	58名	43名
単　元	『英語ノート１』Lesson ４～ Lesson ６		

（２）授業展開

『英語ノート』に基づく活動にオリジナルの活動を加え，**表４**に示す授業展開［５ STEPS］を基本パターンとした。

表４　授業展開［５ STEPS］

STEP	時間	活動項目	活動内容
1	５分	始めの挨拶／導入	始めの挨拶／日付，天気の確認／スケジュールの提示／既習内容の活用（世界の挨拶，絵カードを用いた単語・表現練習）
2	５分	音読活動	読み聞かせ・シャドーイング 〈音読教材〉
3	30分	『英語ノート』の活動	めあての確認／『英語ノート』に基づいた活動 〈実写版 ALT 動画〉
4	３分	振り返り	「ふりかえりカード」への記入
5	２分	終わりの挨拶	グッバイジャンケン 〈実写版 ALT 動画〉

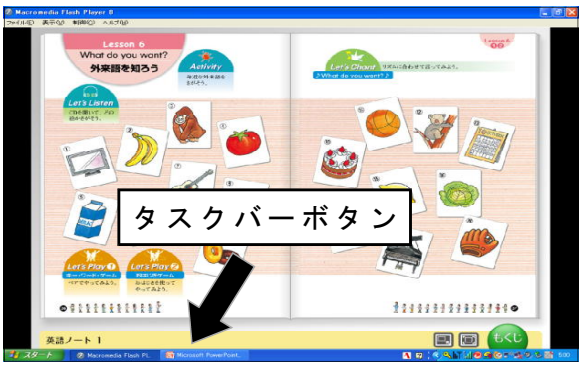
（３）教材・教具

・『英語ノート』及びデジタル版
・ICT 教材（実写版 ALT 動画，音読教材等）
・絵カード等
・電子黒板ユニット（**図15**）
※電子黒板が設置されていない場合は，プロジェクターで映像等を拡大して映写することで，コンテンツを活用することができる。

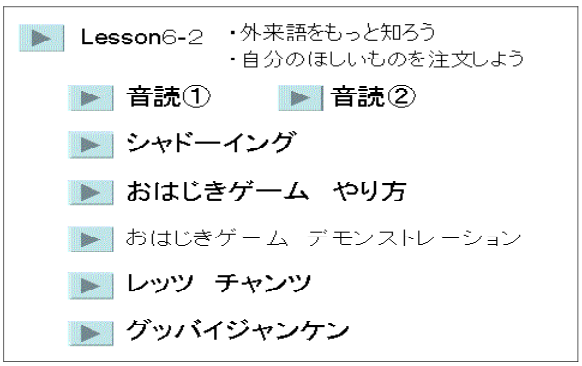
図15　電子黒板ユニット

（４）開発したICT教材の操作方法

検証授業では，デジタル版の画面と開発した ICT 教材の画面（**図16**）を切り替えながら授業を進めていった。以下に操作方法を示す。



デジタル版の画面



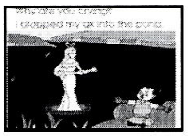
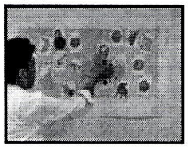
開発したICT教材のメニュー画面

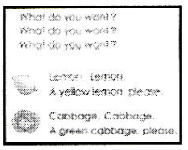
図16　電子黒板の画面

1 デジタル版及び ICT 教材を立ち上げる。
2 デジタル版あるいは ICT 教材を呼び出すために，画面下にあるタスクバーボタンをクリックする。
3 必要なコンテンツを使う。
＊ ICT 教材は Microsoft®　PowerPoint® を利用している。使用の際は「スライドショーの実行」を行い，各タイトル（「シャドーイング」「おはじきゲーム　やり方」等）の左横にある ▶ （動作ボタン）をクリックし，必要なコンテンツを呼び出す。

(5) 学習指導案

［5 STEPS］を基本パターンとして，毎時間分の学習指導案を作成した。Lesson 6 第2時の学習指導案を例として示す。

過程	児童の活動	HRTの活動 ●指導の留意点 ◎評価の観点	実写版ALTとHRTの 指示・発問	電子黒板の画面 教材・教具
導入3分	・絵カードに合わせて英語ノート pp.36-37 の単語を言う。	・絵カードを使い単語をリピートさせる。 ・児童の様子を見ながらテンポよく行う。	"Repeat after me."	・絵カード
	・英語で挨拶をする。 "Hello, I'm fine / happy /hungry." "It's sunny / rainy / cloudy."	・英語で全体に挨拶をした後，児童に今日の調子や天候をたずねる。	"Hello, how are you?" "How's the weather?"	・お天気カード
		・授業スケジュールを伝え，授業内容を確認する。	・Today's schedule	・スケジュール表
音読5分	【読み聞かせ】 ・物語を聞く。 （文字なし2回，文字あり1回） ・物語を聞いて，聞き取ったことを発表する。	▶ 「音読①」をタッチし，物語（文字なし）を聞かせる。 ▶ 「音読②」をタッチし，物語（文字あり）を聞かせる。 ●どんな場面か，どんな音を聞き取ることができたかを児童に尋ね，確認する。	・どのような場面ですか。 " Listen." ・次にどんな音が聞き取れますか。 " Listen again." ・確認しましょう。 " Listen."	（電子黒板上の画面） 文字なし 文字あり 
	【シャドーイング】 ・シャドーイングをする。	・どのような場面か確認した後， ▶ 「シャドーイング」をタッチし，センテンスを聞かせてからシャドーイングをさせる。	・どのような場面ですか。 " Listen." " Let's try shadowing."	・シャドーイングのセンテンス Why are you crying?
展開8分		・めあてを言う。 ①外来語をもっと知ろう		・めあてカード
	【Let's Play】 ・「おはじきゲーム やり方」を聞き分かったことを発表する。 ・「おはじきゲーム デモンストレーション」を見て分かったことを発表する。 （おはじきゲームのやり方） ①おはじきを5個もらう。 ②英語ノート pp.36-37 の絵から5つ選び，その上におはじきを置く。 ③ HRT が発音する単語の絵におはじきを置いていたら，おはじきを取ることができる。 ④おはじきがなくなったら，"Finished" と言う。	▶ 「おはじきゲーム やり方」をタッチし，おはじきゲームのやり方を聞かせる。 ▶ 「おはじきゲーム デモンストレーション」をタッチし，おはじきゲームのデモンストレーションを見せる。 ・おはじきゲームのやり方を確認する。	・次はおはじきゲームです。ホワイト先生が説明してくれます。 "Listen." *(White sensei)* *Open your text book to page 36 and 37.* *Take five ohajiki.* *Put ohajiki on the pictures. Anywhere is OK.* *Now White sensei will say a word.* *If you have an ohajiki on the picture, take the ohajiki off.* *When you have no ohajiki on your textbook, say "Finished!"* *Did you get it?"*	・おはじき（1人 5個） ・英語ノート ・デジタル版 （電子黒板上の画面） 活動の説明 （電子黒板上の画面） デモンストレーション 
	・英語ノート pp.36-37 を開き，おはじきゲームをする。	・英語ノート pp.36-37 の単語を発音する。		
展開10分	【Let's Listen ①】 ・絵カードを見て，国名と食べ物の名前を答える。 ・デジタル版の英語を聞き，聞き取れたことを発表する。 ・どこの国からきた食べ物か考えて，線で結ぶ。	・絵カードを見せ，どこの国の国旗かを尋ねる。 ・絵カードを見せ，食べ物の名前を尋ねる。 ・デジタル版の英語を聞かせ，聞き取れたこと確認する。 ・どこの国からきた食べ物かを考えさせ，線で結ばせる。	"Which country?" "What's this?" "Listen."	・絵カード ・電子黒板 ・英語ノート ・デジタル版

	・デジタル版の英語をもう一度聞き，聞き取れたことと答えを確認する。	・デジタル版の英語をもう一度聞かせ，聞き取れたことと答えを確認する。 ●身の回りにある外来語のもとは英語だけでなく様々な言語であることやsuki-yaki，sushiのように日本語から英語になった表現もあることに気付かせる。	"Listen again."	
展開13分		・めあてを言う。 ②自分の欲しいものを注文しよう		
	【Let's Listen ②】 ・英語ノートp.39の絵を見て，誰が何をしているところかを答える。 ・デジタル版の英語を聞き，健が注文したものを○で囲む。 ・聞き取れたことと答えを発表する。 ・デジタル版の英語を聞き，麻衣が注文したものを□で囲む。 ・聞き取れたことと答えを発表する。 ・店員の言い方と注文の言い方を聞き取り，発表する。	・英語ノートp.39の絵の状況を確認する。 ・デジタル版の英語を聞かせ，聞き取れたことを尋ねる。 ・デジタル版の英語を聞かせ，健が注文したものを○で囲ませる。 ・聞き取れたことと答えを確認する。 ・デジタル版の英語を聞かせ，麻衣が注文したものを□で囲ませる。 ・聞き取れたことと答えを確認する。 ・店員の言い方と注文の言い方を聞き取らせ，確認する。	"Open your text book to page 39" ・何をしているところですか。 ・健が注文します。 "Listen." "Listen again." ・次に麻衣が注文します。 "Listen." "Listen again." ・次は店員さんが言っていることに気をつけて聞いてみましょう。	・電子黒板 ・絵カード ・英語ノート ・デジタル版
	・絵カードに合わせ英語ノートp.39の単語を言う。 ・かぶっちゃやあよゲームをする。 ①英語ノートp.39の食べ物の中で，食べたいものを答えながら一つ指差す。 ②だれとも重ならなかったらその食べ物をもらうことができる。 "What do you want?" "Cake, please."	・絵カードを使い，英語ノートp.39の単語や表現を言わせる。 ①単語を言う。 ②注文する。"○○, please." ③HRTが尋ねるのに対して注文する。 HRT：What do you want? 児童：○○, please. ・かぶっちゃやあよゲームをすることを告げ，やり方を説明する。 ◎自分の欲しい食べ物をメニューから選んで答える。（行動観察） ・数名の児童に獲得した食べ物を紹介させる。	・食べ物の名前を言いましょう。 ・注文してみましょう。 ・次は先生が尋ねるから注文しましょう。 "What do you want?"	・絵カード ・食べ物カード（グループ分）
展開3分	【Let's Chant】 ・デジタル版のチャンツ（文字なし）を聞き，聞き取れたことを発表する。 ・チャンツ（文字あり）を聞き，聞き取れたことを発表する。 ・チャンツを言う。	・デジタル版のチャンツを聞かせ，聞き取れたことを確認する。 ▶ 「レッツチャンツ」をタッチし，チャンツを聞かせ，聞きとれたことを確認する。 ▶ 「レッツチャンツ」をタッチし，チャンツを言わせる。 ●立ってリズムに合わせて言わせる。	・まず聞いてみましょう。 ・リズムに合わせて言ってみましょう。 "Let's chant."	・デジタル版 （電子黒板上の画面） 文字ありのチャンツ 
挨拶3分	・ふりかえりカードを書き，本時の授業を振り返る。 ・グッバイジャンケン，挨拶をする。	・本時の授業を振り返る。 ・クラスや児童について，良かった点やがんばっていた点をほめる。 ▶ 「グッバイジャンケン」をタッチし，ジャンケン，挨拶をさせる。	*It's time for us to finish. You did a great job, everyone.* *Lastly let's do janken. Ready?* *Rock, scissors, paper 1, 2, 3.* *Did you win or lose?* *See you next week. Bye-bye.*	・ふりかえりカード （電子黒板上の画面） グッバイジャンケン

（６）検証データ

検証授業を通して次の３つのデータを得た。これらを用いて，次項で，本研究における成果等を検証する。なお，「ふりかえりカード」「事後アンケート」については，研究協力校３校（５クラス）の児童114名のうち，全検証授業に出席した85名を分析対象とした。

①「ふりかえりカード」

「ふりかえりカード」は，４段階のリカート・スケール[注５]５項目と記述回答１項目で構成し，全検証授業（12時間）において実施した。質問項目１～３は児童の関心・意欲・態度を測定する項目とし，質問項目４と５は児童の学習の理解を測定する項目とした。

今日の授業を振り返ってみて，
【リカート・スケール項目】
1　楽しかったですか。
2　すすんで先生や友だちの話を聞くことができましたか。
3　すすんで英語を声に出すことができましたか。
4　今日の活動はよくわかりましたか。［各レッスン第１～３時］
5　音読活動はよくわかりましたか。
【記述回答項目】
6　今日の授業の感想をできるだけ多く書いてね。
（初めて知ったこと，よかったこと，むずかしかったことなどについて）
［各レッスンの第４時だけの項目］
7　グループで（　　）を紹介した感想を書いてください。
（友だちどうしで点をつけたり，いいところを書いたりしてどうでしたか。）

②「事後アンケート」

「事後アンケート」は，３段階のリカート・スケール14項目と記述回答３項目で構成し，全検証授業終了後に実施した。下に記述回答項目を示す。

【記述回答項目】
1　グループで「好きなもの・ファッション・パフェ」を紹介して，友だちにいいところを見つけてもらったり，友だちのいいところを見つけたりして，どう思いましたか。
2　レッスン４，５，６の授業についての感想を書いてください。
①　音読・シャドーイングについて
②　ホワイト先生*と勉強して
③　英語の文字をなぞったり，さがしたりして
3　外国語活動の授業をしてよかったことは何ですか。理由も書いてください。

＊「ホワイト先生」は実写版 ALT 動画に出演の外国語指導助手を指す。

③「研究協議」

「研究協議」は，検証授業後に設定し，授業者（研修員２名及び研究協力校における学級担任５名）及び授業参観者から出された意見・感想を記録した。

５　研究の検証

ここでは主に次の３点について検証を行う。１点目として，研究内容に見られた効果を検証する。２点目として，授業モデルについて，児童の関心・意欲・態度にどのような効果が見られたか，また，教材や指導方法が児童の実態に即していたかを検証する。３点目として，外国語活動はスキルの定着を目標とはしていないが，授業モデルを用いて英語の音声や文字に触れさせる中で，児童のリスニング能力及び語彙技能習得に見られた効果を検証する。

（注５）４段階のリカート・スケールの数値は，質問に対する回答を，「とても楽しかった」４点，「まあまあ楽しかった」３点，「あまり楽しくなかった」２点，「ぜんぜん楽しくなかった」１点とし，各項目の平均点を算出したものである。リカート・スケールを%に換算した場合，4.0は100%を示す。

－研究の内容について－

「**３　研究の内容**」で述べた以下の４点についての効果を考察する。

（１）ICT 教材「実写版 ALT 動画」の開発について
（２）「聞く」・「話す」活動の充実について
（３）文字の効果的な導入について
（４）評価の方法について

（１）ICT教材「実写版ALT動画」の開発について

研究内容の効果を以下の検証データから考察する。

検証データ

「事後アンケート」から

◆記述回答項目２－②「ホワイト先生と勉強してどう思いましたか」について

〈活動のわかりやすさ〉

・ゲームの説明をしてくれたのでゲームのやり方が分かりました。分かりやすくお客さんやお店の人のまねをしてくれたので楽しくゲームができてよかったです。

・ホワイト先生と他の先生が，ゲームの説明をしてくれている時，ホワイト先生は英語をゆっくり，はっきり言ってくれたので，すごく聞きとりやすかったです。

〈ネイティブの音声〉

・ホワイト先生と勉強はしてないけど発音とかきいて「やっぱ外国人やなー」と思いました。

・ホワイト先生は英語の発音とかがすごくきれいだなと思いました。

〈外国人に対する親しみ〉

・ホワイト先生とは，電子黒板で見るだけだったので，一度話してみたいと思いました。

・外国の人と一緒に勉強したことがなかったので，とても楽しかった。

・英語でしゃべってる時も，明るくて，ホワイト先生と勉強するのが，おもしろかった。

「事後アンケート」の記述回答から，実写版 ALT が行う活動の説明やデモンストレーションが,活動内容の理解や発音の違いの気づきに有効であることがわかる。加えて，実写版 ALT との学習が，外国人に対する親しみにつながっていることがわかる。

「研究協議」から

〈T･T の場面創出〉

・このコンテンツがあれば，活動の説明やデモンストレーションをネイティブの発音で聞かせることができ，ALT の替わりとなり英会話や発音の不安が少なくなる。

・デジタル版とこのコンテンツがあれば，学級担任単独でも授業が行える。

・T･T 時における学級担任の役割，ALT の役割を学べた。

・指導しながらでも，子どもと同じ気持ち（学習者）になっていた。

〈操作の容易さ，指導・教材作成モデル〉

・コンテンツの操作もそれほど難しくない。

・ルール説明を英語でしてくれるので，英語（ネイティブの発音）を聞かす機会が増える。

・学級担任が，日本語で説明するのではなく，児童の気づき，聞き取れた単語を取り上げて，活動内容等を英語を通して理解させていくスタイルがよかった。

・『英語ノート』をどう扱っていいかわからないので，『英語ノート』を生かした授業のスタイルは，指導のモデルになる。

・教材を作っても，ねらいにそっているか不安であるから，教材作成のモデルになる。

〈児童の姿〉

・実写版 ALT による活動の説明やデモンストレーションに対して，一生懸命聞こうとする姿勢が印象的であった。

・「ホワイト先生はいつ来てくれるの」など児童は，画面上の ALT を身近な存在に感じ，親しみを持っている。

これらの意見から，指導者にとって，また児童にとっても，このコンテンツはデジタル版と合わせ,外国語活動の授業において有効な補助教材であったことがわかる。

考察

「実写版 ALT 動画」を用いた授業については，先述した「事後アンケート」の分析から，実際の ALT と学級担任が行う T･T に近い効果を児童に与えているとともに，学級担任の英語運用に対する不安を軽減したことがわかる。

また，検証授業は，ICT 教材等の開発，授業モデル構築に携わった研修員２名及び研究協力校の学級担任５名の計７名で実施した（**図17**)。その結果，機器の操作に対する慣れは必要であるが，誰もが無理なく使用できる教材であることが実証された。

図17　授業の様子

さらに昨年度のオリジナル ICT 教材で登場したアニメーション ALT と比較して，「実写版 ALT 動画」では，児童が表情やジェスチャーから効果的なコミュニケーションの方法が学ぶことができた。また，指導者においても『指導資料』に掲載されている T･T での授業展開に近い方法で授業を行えたことが，今年度新たに検証できたことである。

以上のことから，研究内容（１）においては，次の効果があったと考える。

【学級担任の指導における効果】
・外国語活動を単独で指導することができる。また，同時に ALT との T･T 時における学級担任の役割や ALT との連携の仕方を学ぶことができる。
・発音や英語運用に対する不安，負担が軽減される。
・児童とともに学ぶ「学習者のモデル」として指導にあたることができる。
【児童に見られた効果】
・発音やコミュニケーションスキル（表情，ジェスチャー等）のモデルとなるとともに，外国の人等に親しみをもつきっかけとなると考える。

また，検証授業での実証はないが，本研究の「実写版 ALT 動画」は，実際の授業場面だけでなく，教員が自らの英語力を向上させる教材として，校内研修及び自己研修等で活用できると考えている。これは，教員調査においてニーズの高かった「指導する教員の英語力の向上」についての課題解決につながるものと考えている。

（２）「聞く」・「話す」活動の充実について

研究内容の効果を以下の検証データから考察する。

検証データ

「ふりかえりカード」から

◆質問項目５「読み聞かせ・シャドーイングはよくわかりましたか」について

表５　質問項目５の授業別平均値

	第１時		第２時		第３時		第４時		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	単元平均
Ｌ４	3.28	0.63	3.41	0.58	3.42	0.66	3.61	0.52	3.43
Ｌ５	3.29	0.72	3.51	0.61	3.74	0.44	3.65	0.55	3.55
Ｌ６	3.58	0.56	3.67	0.54	3.84	0.40	3.76	0.46	3.71
平均	3.38		3.53		3.67		3.67		3.56

[児童の記述回答]から

・初めて，もも太ろうを英語で聞いたり，言えたりして楽しかったです。また，やってみたいしちがう話も英語でしてみたいと思いました。
・シャドーイングはリズムがはやくてたのしかった。
・シャドーイングでは，だんだん発音がよくなってきているのでとてもうれしいです。
・シャドーイングは速くてついていくことができませんでした。むずかしいけどがんばりたいです。

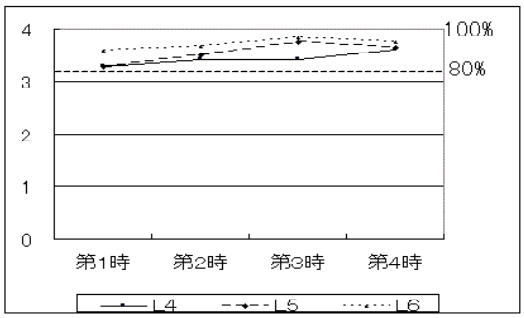


図18　質問項目５　授業別平均値グラフ

前頁**表５**は質問項目５「読み聞かせ・シャドーイングはよくわかりましたか」についての各時間の平均値を示したものである。全12時間の授業の平均値が3.56と高かった。**図18**は授業別平均値を単元別に折れ線グラフで表したものである（以下の授業別平均値グラフも同様)。各単元の第１時は物語の始まりの部分を扱うため，児童の理解度が低いが，授業が進むにつれ高くなっていることがわかる。

また，**表５**からわかるように，Ｌ４,Ｌ５,Ｌ６のそれぞれの単元において理解度の平均値が異なっている。その要因としては，活動への慣れとともに，３つの物語におけるセンテンス数の違いがあると考えられる。Ｌ４「桃太郎」は69センテンスと最も長い物語であった。この単元を振り返り，センテンスが多いと児童の負担が大きくなるのではないかと考えた。そこで，次のＬ５「アリとキリギリス」では14センテンスと英文の量が少ない物語を選択し教材を作成した結果，児童の理解度は上がっている。Ｌ６「金の斧，銀の斧」は29センテンスとＬ５で扱ったものよりも，センテンス数は多いが，児童の理解度はさらに上がっている。これらのデータは，今後，読み聞かせ教材を選定したり，実施したりする際の目安になると考える。

「事後アンケート」から

◆記述回答項目２－①「音読・シャドーイングをしてどうでしたか」について

・初めてのときよりずいぶんなれて音をききとれるようになってきたと思います。
・昔話やどう話などをきいたりしながら勉強できてよかったです。

記述回答及び「事後アンケート」から，「できるようになってきた」や「わかるようになってきた」という上達実感が，学習の意欲につながったと考える。

「研究協議」から

〈読み聞かせ教材を活用した「聞く」活動について〉

・物語が始まると，児童はとても集中して聞こうとしていた。
・予想以上に音声を聞き取れていたので驚いた。
・回数を経るごとに，聞き取った音声を発表できる児童が増えてきた。
・物語の続きが聞けるのを楽しみにしている児童もいた。
・始めは児童の負担にならないかと思っていたが，児童は違和感なく活動を行い，興味を持って取り組んでいた。

〈シャドーイングによる「話す」活動について〉

・当初はとまどっていた児童も多かったが，（難しいけれど）うまくなりたいという向上心につながっている児童も多く見られた。
・指導者の「口を動かす，口ずさむことからでいいよ」「だんだん言えるようになってきたね」という指示や評価によって無理なく取り組める活動になっている。
・（話された英語を）聞いたすぐ後に続けて発話するため，児童はとても集中して音声を聞けている。『英語ノート』にはない活動だが，これも英語に慣れ親しむ方法の１つになる。続けて取り組めば力になるのではないか。

考察

読み聞かせについては，国語科等でも取り組まれており，児童にとっては，取り組みやすい活動であったことがわかる。また，毎授業の導入時に取り入れたことで計画的に実施できた。このことが，「聞く」姿勢や，絵や聞きとれた音声から内容を推測していくという外国語活動における学習スタイルを身に付けていくことにつながったと考える。

検証授業開始当初,児童はシャドーイング活動そのものに難しさを感じていたが,徐々にそのやり方に慣れ,聞こえた音声に続けて発音していくことができた。また,聞いたことをまねて発話する経験を積むことで，その他の場面においても自発的に音声に続いて発話しようとする児童の姿も見られるようになった。

昨年度の研究では，音読活動を授業終盤に設定していたため，十分に時間がとれないことが課題となっていたが，今年度は，実施時間帯や内容に改善を加え，全検証時間において実施し，その効果を検証できた。

以上のことから，研究内容（２）においては，次の効果があったと考える。

【音読教材を活用した「聞く」活動の効果】
・「音読教材」による読み聞かせは,『英語ノート』の「Let's Listen」に加え，「聞く」活動の充実及び「聞く」習慣の形成につながる。
・読み聞かせは，児童には負担が少なく，むしろ英語の音声への興味・関心を高め，慣れ親しませることに効果があった。
・内容を把握している物語を用いれば，児童は場面をイメージしながら，英語の音声に慣れ親しむことができた。

【シャドーイングによる「話す」活動の効果】
・シャドーイングは，児童の意欲を向上させたり，児童が英語に慣れ親しんだりする活動として効果があった。
・児童は，読み聞かせとシャドーイングを通して聞こえてくる音声をとらえ，絵などを手がかりに意味を理解しようとし，音を聞き，まねていく言語習得のスタイルを身に付けることができた。

読み聞かせについては ICT 教材を作成しなくても，学級担任や ALT が英語の絵本等を読み聞かせることで，同様の効果を得られると考える。導入時間や指導のポイント等については，本研究が参考になるであろう。

（３）文字の効果的な導入について

文字の効果的な導入について，以下**ア**，**イ**に分けて考察する。

ア　音読・シャドーイング，チャンツ等における文字提示について

検証データ

「ふりかえりカード」の[児童の記述回答]から

・音読，シャドーイングで言葉が分かったし，読めたからよかった。
・文字がないより，あるほうがわかりやすかったです。
・よかったことは身のまわりの字を多くよめるようになってきたということです。

文字の提示が，多くの児童にとって英語の聞き取りや発話の補助となっていることがわかる。また，文字を提示し，文字に触れさせることで，児童は「読めた」「読めるようになった」という感想を持てたことがわかる。

「事後アンケート」から

図19は，文字に関する質問の回答結果をグラフに表したものである。

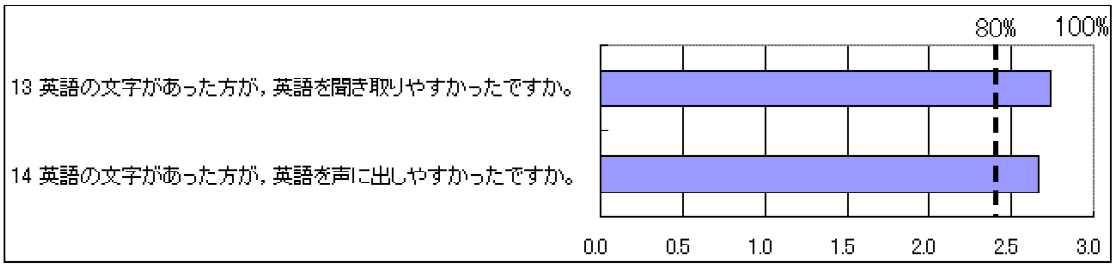


図19　質問項目13,14の結果

リカート・スケール分析においては，質問項目13が2.74，また質問項目14が2.66と高い数値を得た。文字があった方が聞き取りやすく，声に出しやすいという結果となっている。

「研究協議」から

・文字部分の色が音声に合わせて色づけされるオリジナル ICT 教材は,児童が音声を認識したり，発話したりするタイミングを計る補助となっていることがわかる。
・児童は，ローマ字学習で学んだことを生かし，英語を読んでみようとしていた。
・日常生活や身のまわりには英語表示がたくさんあり，普段から自然に英語の文字に触れていると思われる。『英語ノート』の内容程度の文字提示なら児童の負担も少ないであろう。

考察

以上のことから，アにおいては，次の効果があったと考える。

・音読活動やチャンツ等，複数のセンテンスから成る長い英文に触れる場合，文字の提示は，音声を認識したり発話のタイミングをとったりする際の補助となることがわかった。
・文字を提示し，繰り返し文字に触れる機会を増やすことで，既習のローマ字の知識を手がかりにして，自発的に文字を読もうとする姿が見られた。また，文字が読めたという上達実感を持たせることができた。

イ　ペンマンシップ活動について

検証データ

「事後アンケート」から

◆記述回答項目２－③「英語の文字をなぞったり，さがしたりして」について

・ペンマンシップでは「milk」などを書きましたが，初めは書けなかったのに，書けるようになって，うれしかった。
・少しでも文字が書けてうれしかったです。これからも使いたいと思います。
・難しかったけどできてよかったです。なぞっているときは「なんでこの英語こんな読みかたをするんかな」と思ったのもありました。
・たのしかったです。もっと書きたいです。
・英語の文をなぞったりかいたりして，えいごの文字をおぼえられたのがよかった。
・さがすのがおもしろかった。ちょっと似た英語とかのく別がつくようになりました。

ペンマンシップでの文字をなぞったり，さがしたりする活動を通して，児童は文字の形や単語に慣れ親しむことができたことがわかる。また，「なんでこの英語こんな読みかたするんかな」という感想からは，綴りと音の関係に興味を持った児童の姿が見て取れる。

「研究協議」から

・「書く」活動は，外国語活動の内容に示されておらず，児童の負担や英語嫌いの要因にならないかと思ったが，本研究における活動なら，児童も意欲的に活動できていた。

・中学校で，アルファベットや単語を書かなければいけないので，英語嫌いになる子も多い。小学校から，文字に慣れ親しんでもらって中学校に入学すれば，小学校から中学校への壁を低くしてくれるのではないか。

考察

文字提示及びペンマンシップ活動については，昨年度からの取組であるが，ICT 教材（チャンツ）やペンマンシップ用ワークシートは今年度開発したものであり，今後の教材作成の参考となると考える。また本研究では，チャンツでの文字提示を ICT 教材で行ったが，デジタル版で行う場合は，チャンツで用いられる文字を模造紙等に書いて提示することで同様の効果が得られると考える。

以上のことから，**イ**においては，次の効果があったと考える。

・ペンマンシップ活動は，児童が文字の形や単語に慣れ親しむことに効果があった。
・本研究における文字導入及びペンマンシップは児童にとって過度の負担にならず，英語を読もうとする意欲の育成や，中学１年生からの文字に関する学習への負担軽減につながると考える。

（４）評価の方法について

評価の方法については，以下**ア**，**イ**，**ウ**に分けて考察する。

ア　児童による自己評価「ふりかえりカード」

各時間の終わりに児童が「ふりかえりカード」による自己評価を行う時間を設定した。指導者は，各時間ごとのカードを提出させ，児童のがんばり等に対しコメントを入れて返却した。

検証データ

「ふりかえりカード」及び「事後アンケート」の[児童の記述回答]から

・みんなの好きなものきらいなものがよーくわかってよかったと思いました。
・ホワイト先生の説明がまえよりも少しは多く聞けるようになったと思います。
・英語を声に出せるようになった。また，やってみたいです。

児童の記述をみると，その時間に学習した内容について，自らを振り返ることができていたことがわかる。また，「ふりかえりカード」を時系列でファイルしたポートフォリオから，自らの能力の向上や意欲の向上を感じることができていた。

「研究協議」から

・指導者がそれぞれの児童の変容をつかむのに有効である。
・児童が自己認識力を高めるのに有効であるだけでなく，指導者にとっても個々のがんばりを改めて想起し，評価（コメント）できる点がよい。
・児童の評価点を集計することで，指導者が自らの授業を客観的に判断し，改善につなげることができる。
・ふりかえりカードに記入する時間設定が必要であり，できれば時間内に感想等を発表する時間を取れればよい。

考察

以上のことから，**ア**においては，次の効果があったと考える。

・児童は，「ふりかえりカード」を書き，ポートフォリオを作成することにより，その時間でできるようになったこと等を確認できた。このことから，「ふりかえりカード」への記入は，学習を振り返る良い機会となった。また，児童は自己評価を通して，上達を実感し，学習への意欲が高まった。
・指導者にとっては，児童の変容を把握するとともに，自らの授業評価として次時の授業改善に生かせる資料となった。

イ　児童による相互評価「スピーチ名人への道」

各単元の最終時に設定されているショー・アンド・テル等の発表活動において，児童による相互評価を実施した。

検証データ

「ふりかえりカード」及び「事後アンケート」の[児童の記述回答]から

・私は，グループで，ファッションや，パフェを発表する時に，みんな，パフェの絵がきれいなど，ほめてもらったり，逆に友達のいいところも見つけることができて，すごく，みんな楽しめる授業だったとおもいます。
・自分は，ぜんぜんできていなかったのに，友達は「よかった」とかかいてくれて，なんとなくほっとしました。
・友達のいいところを見つけるのは，自分の発表の時に役に立っていたし，悪かったところをふりかえって勉強になりました。
・目線が全くだめだったらしいです。次から悪かった所を直していきたいと思います。
・HちゃんやK君は，すごくじょうずでした。わたしも，もっとじょうずになりたいです。

児童は，相互評価を通して，自己肯定感や安心感を得たり，次回への意欲を高めたりしたことがわかる。また，他人の良いところを見つけて評価することが自らの学習につながることを感じている児童もいることがわかる。

「研究協議」から

・初めての相互評価では，指導者が評価の視点を説明したり，記入するのに時間がかかったりしたが，回を経るごとに，評価することにも慣れ，スムーズに行うことができた。
・相互評価を行った感想をみると，外国語活動の目標となっているコミュニケーションの素地が形成されていることがよくわかる。
・45分の時間のなかでは，毎回行うということは難しいが，単元に一度は実施したい。

考察

以上のことから，**イ**においては，次の効果があったと考える。

児童は，相互評価を通して，互いを認め合うことの楽しさを実感するとともに，自分や友だちのいいところや課題に気づくことができた。また，今後の具体的な学習目標を設定し，更なるコミュニケーション活動への意欲を持つことができた。

ウ　指導者による評価

各単元における評価規準をもとに，『英語ノート』点検，行動観察，発表観察を行い，児童が目標を達成できたかどうかを記入する評価シートを作成した。この評価シート及び「ふりかえりカード」によるポートフォリオを活用し，各単元，学期の評価を行った。

検証データ

「研究協議」から

・評価規準をもとに一枚のシートになっているため，各時間のみとりが行いやすかった。
・評価カードから児童の様子を読み取り，授業改善に生かすことができた。
・このシートがあれば，学期末の評価の際，各時間や単元を振り返ることができる。
・『英語ノート』の点検は，授業後に確実に行えるが，授業内で児童全員の行動観察や発表観察は難しい。
・みとりについては，１時間内で全員を行うのは大変難しい。１単元を通して全員を評価することが目標になる。
・体験的理解や慣れ親しむことを具体的にどのような姿でみとるのか，判断がむずかしい場面がある。

考察

以上のことから，**ウ**においては，次の効果があったと考える。

・評価カードへの記入を通して，児童の実態を把握するとともに，単元，学期を通した児童の変容をつかむことができた。
・評価カードへの記入を通して，授業を振り返るとともに，外国語活動の目標を確認し，目標に則した授業改善につなげることができた。

しかし，研究協議の意見に見られるように，児童の具体的な姿を評価する規準や評価の方法，評価場面については研究の余地があり，今後の研究や実践に期待したい。

－授業モデルについて－

2009年1月～2月に実施されたベネッセ教育研究開発センターの全国の中学２年生2,967名に対する調査によると，中学校入学前の英語の学習や英語に対する気持ちは，「好き（好き＋どちらかといえば好き)」が45.0%，「嫌い（どちらかといえば嫌い＋嫌い)」が42.9%と，「好き」と「嫌い」が拮抗している（ベネッセ教育研究開発センター，2009)。この結果は，小学校段階における外国語活動の授業の在り方を考えさせるものである。

外国語活動では，コミュニケーション能力の素地を養うなかで，言語の大切さや豊かさ等に気づかせたり,言語に対する興味・関心を高めたり，これらを尊重する態度を身につけさせたりすることが重要なポイントとなる。

現在，多くの学校が共通教材『英語ノート』を活用し実践に取り組んでいるが,『英語ノート』は教科書ではないため，独自に様々な活動を組み込んだ実践も見られる。本研究においても,『英語ノート』に基づいた活動に加え，読み聞かせや文字の導入等を組み込んだ授業モデルを構築し，検証授業を実施した。これらが児童の関心・意欲・態度を向上させ，児童の実態に応じたものであるかについて以下の検証データをもとに考察する。

検証データ

「ふりかえりカード」から

◆質問項目１「今日の授業は楽しかったですか」について

表６　質問項目１の授業別平均値

	第１時		第２時		第３時		第４時		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	単元平均
Ｌ４	3.71	0.48	3.78	0.45	3.78	0.42	3.82	0.38	3.77
Ｌ５	3.58	0.54	3.75	0.46	3.82	0.41	3.69	0.49	3.71
Ｌ６	3.68	0.49	3.72	0.48	3.81	0.42	3.75	0.46	3.74
平均	3.65		3.75		3.80		3.76		3.74

[児童の記述回答]から

・チャンツもぜんぶうたえたのでたのしかったです。
・ショッピングゲームはとても楽しかったです。楽しみながら服の言い方の英語を覚えられるのはとても良いことだと思いました。
・インタビューがとても楽しかったです。男の子と久しぶりに話せたのでこういうのもいいなと思いました。これからも，英語をがんばっていきたい。

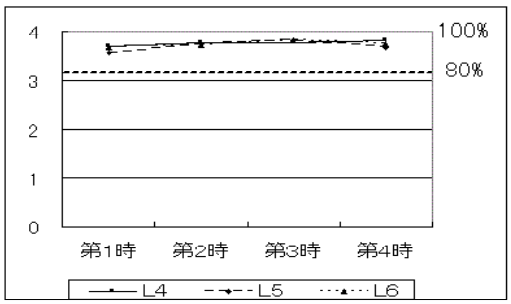


図20　質問項目１　授業別平均値グラフ

・今日は，好ききらいカードでインタビューするのが，とても楽しかったです。その人によって，好

きそうなものをインタビューするのを変えるのがすこしむずかしかったです。でも，ちゃんとみんな答えてくれるし，シャドーイングもおもしろかったです。

前頁**表６**は質問項目１「今日の授業は楽しかったですか」についての各時間の平均値を示したものである。初回の授業から3.71と高く，最終授業時の3.75まで，全ての時間において高い数値を維持することができており（**図20**），児童は授業を楽しんだことがわかる。

また，児童の記述回答から，単に活動が楽しかっただけではなく，できる楽しさ，わかる楽しさ，コミュニケーションの楽しさを体験したことが児童の更なる学習意欲につながったと考える。

◆質問項目２「すすんで先生や友だちの話を聞くことができましたか」について

表７　質問項目２の授業別平均値

	第１時		第２時		第３時		第４時		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	単元平均
Ｌ４	3.53	0.53	3.55	0.55	3.66	0.48	3.67	0.50	3.60
Ｌ５	3.58	0.50	3.61	0.54	3.74	0.44	3.65	0.53	3.64
Ｌ６	3.66	0.48	3.69	0.46	3.78	0.45	3.76	0.43	3.72
平均	3.59		3.62		3.73		3.69		3.66

[児童の記述回答]から

・友達の話を聞いて何が好きで何がきらいなのか英語で聞いても分かるようになった。
・ステレオゲームは，だれが何を言っているのかよく耳をすましてききとれたと思います。

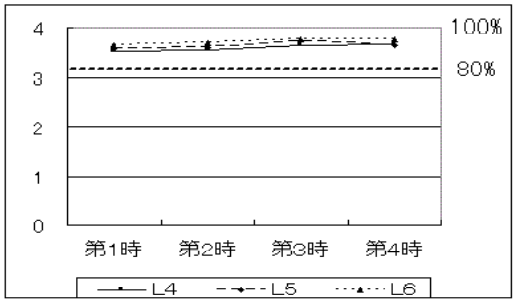


図21　質問項目２　授業別平均値グラフ

表７は質問項目２「すすんで先生や友だちの話を聞くことができましたか」についての各時間の平均値を示したものである。各単元平均をみると，Ｌ４が3.60，Ｌ５が3.64，Ｌ６が3.72と，単元を追うごとに平均値が上がっているとともに，**図21**からわかるように，各単元において高い数値を維持していることもわかる。

また，記述回答から，児童は回を追うごとにすすんで先生や友だちの話す英語を聞くことができるようになったことがわかる。

◆質問項目３「すすんで英語を声に出すことができましたか」について

表８　質問項目３の授業別平均値

	第１時		第２時		第３時		第４時		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	単元平均
Ｌ４	3.33	0.68	3.40	0.56	3.49	0.55	3.54	0.55	3.51
Ｌ５	3.51	0.57	3.55	0.59	3.62	0.58	3.54	0.57	3.56
Ｌ６	3.66	0.50	3.65	0.50	3.67	0.50	3.74	0.44	3.68
平均	3.50		3.54		3.59		3.61		3.56

[児童の記述回答]から

・いつも聞いている英語だったけど言うのが難しかったです。
・ちょっときんちょうして声がちいさかった。つぎは,もっと声を出せるようにしようと思いました。
・いつもよりたくさん英語が，話せました。
・少し英語を言うのがとまどったけどみんなに教えてもらったので言えました。

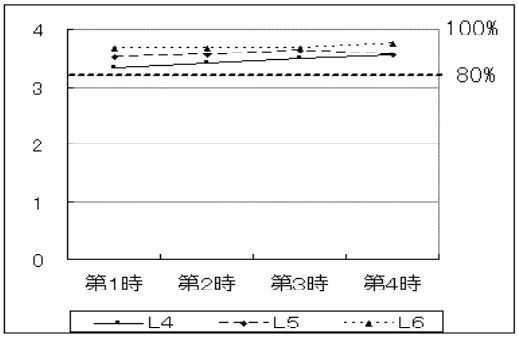


図22　質問項目３　授業別平均値グラフ

表８は質問項目３「すすんで英語を声に出すことができましたか」についての各時間の平均値を示したものである。全12時間の授業の平均が3.56と高い数値を得た。**図22**からも各単元において高い数値を維持していることがわかる。

児童の記述回答から，児童は戸惑いを感じながらも，回を追うごとにすすんで英語を声に出すことができるようになったことや，児童が互いに協力し合い，英語を話すことができたこと等，態度面における変容が見られたことがわかる。

◆質問項目４「今日の活動はよくわかりましたか」について

表９　質問項目４の授業別平均値

	第１時		第２時		第３時		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	単元平均
Ｌ４	3.65	0.57	3.91	0.29	3.88	0.32	3.80
Ｌ５	3.58	0.57	3.71	0.49	3.85	0.39	3.68
Ｌ６	3.82	0.40	3.85	0.36	3.88	0.33	3.85
平均	3.68		3.81		3.87		3.78

注：第４時については記述式回答としたため，リカート・スケールによる質問を行っていない。

[児童の記述回答]から

・韓国語のあいさつの仕方も何どもくりかえしてよくわかりました。
・レッツリスン１のどこの国からきた食べ物やレッツリスン２の健と麻衣の注文がとてもわかった。
・わからなかったところもわかるようになってよかったです。もっといろいろな勉強をしたいです。
・ステレオゲームのせつめいをホワイト先生がしてくれるけどまだあまり意味が分からないのではやく英語をおぼえて分かるようになりたいです。

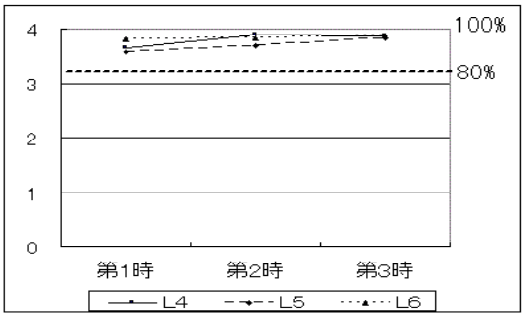


図23　質問項目４　授業別平均値グラフ

表９は質問項目４「今日の活動はよくわかりましたか」についての各時間の平均値を示したものである。各単元の第１時の平均値は3.68，第２時の平均値は3.81，第３時の平均値は3.87と，授業が進むにつれ理解度が上がっている様子がうかがえる。また，**図23**からわかるように，各単元において高い数値を維持していることもわかる。これらのことから,本研究内容で作成した教材や指導方法等が，児童のニーズや実態に即したものであったと考える。さらに，記述回答から,「できた経験」だけでなく「できなかった経験」も，児童の学習意欲の向上につながったと考える。

「事後アンケート」の[児童の記述回答]から

◆記述回答項目３「外国語活動の授業をしてよかったことは何ですか。理由も書いてください」について

・初めむずかしかったのもだんだんできてきて英語が楽しくなった。授業をしてよかったのは英語を好きになれたことです。
・ちょっとだけ英語が分かったことです。英語が分かってたらこれから先，役にたつと思うか

らです。
・英語はいろいろな国によってちがうけど英語を話したりできるようになってほかの国へ行っても話したりできるかもしれないのでよかったと思いました。
・テレビとかを見ていて外国語がたまに出てきて前まではよく分からなかったけど，外国語を習って分かるようになった。
・英語の時間が楽しかった。もっと英語を勉強して外国の人としゃべりたいです。

以上のことから，検証授業を通し，児童は，英語に対する関心や，異なる文化をもつ人と話したいという意欲を高めることができたと考える。

考察

以上のことから，本研究で構築した授業モデルにおいては，次の効果があったと考える。

本研究内容に基づいて実施した検証授業を通して，外国語活動に対する児童の関心・意欲を向上させるとともに，積極的に自分の思いを伝えようとする態度を育成することができた。同時に，本研究内容で作成した教材や指導方法等が，児童のニーズや実態に即したものであったといえる。また，コミュニケーションの楽しさを体験したことや学習内容を理解できたことが，次の活動への意欲につながり，さらに理解したいという児童の知的欲求を満たすことがわかった。これらのことは，「小学校段階での英語嫌いをつくらないこと」及び「中学校への円滑な接続」に対しても有効であるとともに，本研究における授業モデルの有効性を示すものと考える。

－児童のリスニング能力及び語彙技能習得における効果について－

『英語ノート』及び『指導資料』では，「聞く」・「話す」活動が中心になっているが，先述の児童のニーズ調査結果においても明らかなように，「読む」・「書く」活動への興味・関心が高くなっている。

本研究では，『英語ノート』の活用とともに，「聞く」・「話す」活動をより充実させるために，音読活動を組み入れた。また，「読みたい」「書きたい」といった児童のニーズに対応するために，一定の負荷を与えつつも児童にとって過度の負担とならないよう配慮し，チャンツやペンマンシップの活動に文字を導入した。

ここでは，児童が『英語ノート』，デジタル版及び『指導資料』の内容に加え，これらのオリジナル教材を使用したことによるリスニング能力及び語彙技能習得の変容を検証するため，検証授業前後に「児童聞き取りクイズ①，②」を行い，結果を分析することとした。

なお，クイズは研究協力校３校114名の児童を対象に実施し，そのうち事前クイズ，事後クイズの両方に回答した102名分をデータの分析対象としている。

ア　リスニング能力における効果

（ア）「児童用聞き取りクイズ①」

調査には，国立教育政策研究所「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」で使用された「児童用聞き取りクイズ」（全21問）を用いた。クイズは，音声（単語・会話）を聞いて，それぞれに対応する絵や番号を選ぶ形式となっている（**図24**）。

図24　「児童用聞き取りクイズ①」問題例

（イ）調査結果

「児童用聞き取りクイズ①」の結果を**図25**に示す。検証授業前の正答率の平均と検証授業後の正答率の平均の差が統計的に有意か確かめるために，有意水準５％で両側検定のｔ検定(注６)を行ったところ，検証授業の前後の正答率の平均の差は有意であることがわかった。

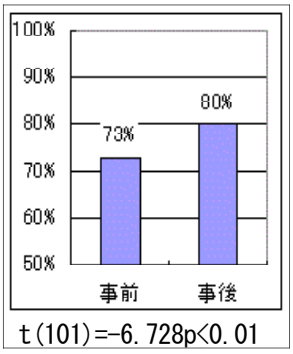


図25　調査結果

イ　語彙技能習得における効果

（ア）「児童用英語クイズ②」

調査には，「児童用英語クイズ②」（全13問）を用いた。これは，中村(2006)(2008)などで提案されている多角的語彙習得モデルに基づいた昨年度の事前・事後テスト（『平成20年度和歌山県教育センター学びの丘研修員研究紀要』p.27参照）を参考に作成したものである。

多角的語彙習得モデルでは，**図26**のように語が意味・音声・文字という３つの素性からなり，これら素性間の対応関係を習得することが語彙習得の一面であると捉えられている。また，①～⑥の対応関係は語彙に関する技能であり，それぞれ個別に習得されるものとされている。各技能が意味することは**表10**のとおりである。

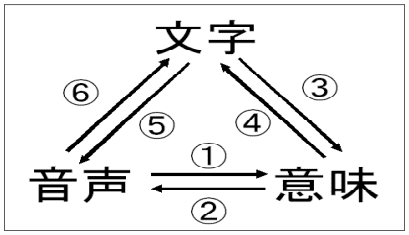


図26 多角的語彙習得の模式図

表10　多角的語彙習得①～⑥の意味

①音声から意味：　語の発音を聞いて，その意味がわかる
②意味から音声：　意味（実物，絵，写真などのイメージ）を音声化できる
③文字から意味：　語のスペリングを見て，その意味がわかる
④意味から文字：　意味（実物，絵，写真など）から語のスペリングがわかる
⑤文字から音声：　語のスペリングを見て，それを音声化できる
⑥音声から文字：　語の音声を聞いて，語のスペリングがわかる

本年度は，筆記で行える上記の①③④⑥について調査した。②⑤については，パソコン及びソフトウェアが必要なため今年度は実施していない。以下に内容形式及び問題例（次頁**図27**)を示す。

①音声から意味：音声を聞いて，それぞれに対応する絵を選ぶ形式（４択）
③文字から意味：スペリングを見て，それぞれに対応する絵を選ぶ形式（４択）
④意味から文字：絵を見て，それぞれに対応するスペリングを選ぶ形式（４択）
⑥音声から文字：音声を聞いて，それぞれに対応するスペリングを選ぶ形式（４択）

（注６）ｔ検定：２条件の平均の差が偶然の差であるか否かを判定する検定方法である。偶然の差でないと判断された場合，有意差があるとされる。なお，ｔは検定統計量であり，各群の個体数，平均値，標準偏差から算出する。ｐはｔの出現確率を示す。例えば，ｐ＜0.01は１％水準で有意差が見られることを示している。通常５％水準より小さい場合に有意差有りと判断する。

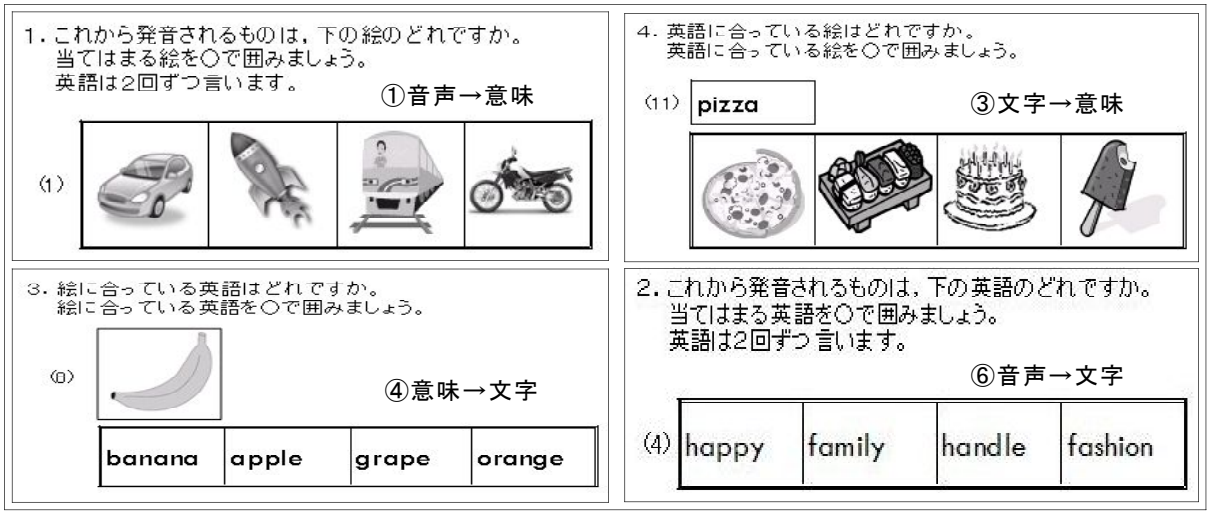


図27　「児童用英語クイズ②」問題例

（イ）技能別結果

図28は「児童用英語クイズ②」の事前・事後の正答率の平均を比べたものである。

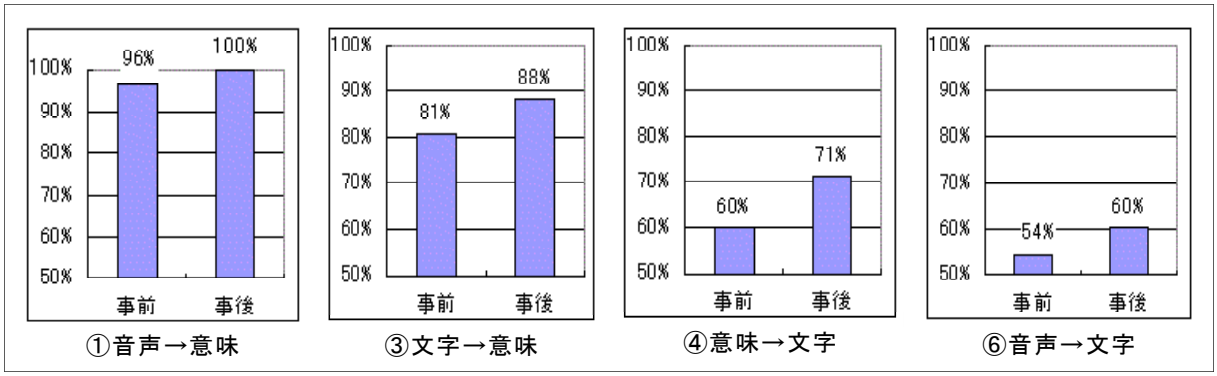


図28　「児童用英語クイズ②」調査結果

検証授業前の正答率の平均と検証授業後の正答率の平均の差が統計的に有意か確かめるために，有意水準５％で両側検定 Wilcoxon の符号付順位和検定(注７)を行ったところ，「音声→意味」，「文字→意味」，「意味→文字」においては，検証授業前後の正答率の平均の差は有意であることがわかった（表11）。

表11　Wilcoxonの符号付順位和検定結果

		事前		事後		
	n	平均	標準偏差	平均	標準偏差	P 値
音声→意味	102	2.89	0.31	3.00	0.00	0.0009**
文字→意味	102	2.42	0.82	2.65	0.67	0.0013**
意味→文字	102	1.79	0.90	2.14	0.83	0.0014**
音声→文字	102	2.17	1.30	2.41	1.33	0.0510-

注：**1%水準で有意，-有意でない。

しかし，「音声→文字」については，有意差が確認できなかった。これは，本研究における検証授業においては，絵などを示しながら「意味」を中心とした語彙技能習得がなされたことが要因として考えられる。また，第４学年で学習したローマ字を手がかりに文字を読む（音声化する）児童もいるが，英単語の発音とは異なる語も出題されていたため，イメージした音声とつながらなかったことが考えられる。

（注７）一対の標本によるノンパラメトリック検定法である。t 検定に対応し，t 検定で必要とされる仮定が満たされない場合に用いる。

ウ　考察

ア，**イ**から検証授業前後のリスニング能力及び語彙技能習得の変容について，以下のように考察する。

【リスニング能力】

「児童用聞き取りクイズ①」の結果から，デジタル版にオリジナル教材「実写版 ALT 動画」「音読活動」等を取り入れた授業が，児童のリスニング能力の向上に有効であることがわかった。

【語彙技能習得】

「児童用英語クイズ②」の結果から，本研究で取り組んだ音読活動，チャンツ等における文字の提示，ペンマンシップ活動等の文字導入が，語彙技能習得のうち「音声→意味」，「文字→意味」，「意味→文字」に有効であることがわかった。

6　研究のまとめ

本研究のまとめとして，（1）児童におけるコミュニケーション能力の素地育成について，（2）指導者におけるデジタル版及び ICT 教材の活用について，（3）継続研究における成果と課題について述べる。

（1）児童におけるコミュニケーション能力の素地育成について

本研究における活動内容を次に示す「外国語活動の目標」（＊2）に則して検証する。

外国語活動の目標は次の三つの柱から成り立っている。

① 外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深める。

② 外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

③ 外国語を通じて，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

以上の三つの柱を踏まえた活動を統合的に体験することで，中・高等学校における外国語科の学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくろうとするものである。

① 外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深める。

ICT 教材を用いることにより，より多くの英語のモデル音声を示すことができた。児童は繰り返し音声に触れることによって，日本語との音声の違いを意識する習慣を身に付けることができた。また，「国旗クイズ」「衣装クイズ」等の活動を通して，児童は世界の文化の多様性に気づき，世界の様々な文化への興味・関心が高まったと考える。さらに，実写版 ALT との学習が，異なる文化を持つ外国の人と話をしたいという意欲につながった。このように，児童は様々な「聞く」・「話す」活動を通して，気づきを共有し，言語や文化について体験的に理解を深めることができたと考える。

② 外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

実写版 ALT の説明が理解しやすかったことや，各単元で学んだ単語や表現を繰り返し使い，慣れ親しんだことに加えて，児童の興味・関心に応じた題材を扱ったインタビュー及び発表活動を行ったことが，児童の積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながったと考える。さらに，児童は，相互評価を通して互いを認め合うことの楽しさや言語を用いたコミュニケーションの大切さを実感できたと考える。

③ 外国語を通じて，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

直山・兼重は「慣れ親しむとは，『定着』を図ることではなく，外国語を聞いて，抵抗感を感じずに聞き入ったり，一部の単語が分かって喜びを感じたりすることである。また，発話とは，知っている語彙を使って自分を表現しようとしたり，普段聞き慣れた表現が思わず口から出たりすることである。（＊3）」と述べている。本研究においても，音読活動，ALT 実写版の英語による指示，説明，デモンストレーションを通して，多くの英語を聞いたり，まねたりしながら，児童は多くの英語に触れるこ

とができたとともに，外国語を使って自分の思いを伝えるコミュニケーション活動を通して，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができたと考える。

以上のことから，本研究における授業モデルは，外国語活動の目標に則し，児童のコミュニケーション能力の素地育成につながるものであったと考える。

（２）指導者におけるデジタル版及びICT教材の活用について

ICT 教材の活用にあたっては，機材の設置や使用方法に習熟するための時間がある程度必要である。しかし，本研究の検証授業では，研究協力校の学級担任がそれほど多くの時間を必要とせず，デジタル版及びオリジナルの ICT 教材を用いた授業を円滑に行うことができた。

これまで述べてきたように，デジタル版や本研究で開発した ICT 教材の積極的な活用は，児童が英語に慣れ親しむ機会を多くするとともに，学級担任が単独で指導する場合にも ALT との T･T に近い環境を創出することができる等，外国語活動の指導において有効であることがわかった。

また，従来からのいわゆるアナログ教材（絵カード，ワークシート等）の良さに注目し，それらを ICT 教材と併用することで，それぞれの利点を生かした授業づくりが必要であることが確認できた。

今後，誰が高学年の学級担任となっても，担任主導でよりよい外国語活動の授業が行えるように，ICT 教材の活用方法を含めた校内研修や学校全体で外国語活動に取り組む体制づくりが必要である。

表12に検証授業の結果からまとめた指導のポイントを示す。

表12　指導のポイント

実写版ＡＬＴ動画	日本語に訳して英語を理解するという習慣をなるべく付けないように，学級担任は，児童に聞こえた英語や気づいたことから内容を推測させる。その内容を児童に発表させることで，クラス全体に内容を理解させていくことを大切にする。 ○児童と同じ学習者の立場に立ち，聞くポイントや見るポイントを指示してから視聴させる。 指示例）「ホワイト先生はどんな活動・ゲームをするように言っていますか。聞いてみましょう」「ホワイト先生は何が好きか聞いてみましょう」 ○児童の気づきや聞き取れたことを引き出すような発問を行う。 発問例）「ジェスチャーからどんなことがわかりましたか」「机に並べたカードで何をすると話していましたか」 ○児童に聞き取れたことや気づいたことを発表させる際は，一部でもわかれば発表していけるように声かけをする。 指示例）「わかったことを一つでもいいから発表してみましょう」 ○聞き取れたことや気づいたことを先生やみんなに伝えたいという児童一人ひとりの気持ちを大切にするためにルールを設定したり，学習形態の工夫を行う。 工夫例）口々に発表するのではなく気づいたことがあれば黙って手を挙げる。 ペアやグループの形態で発表を行う。
「聞く」活動（読み聞かせ）	教材は平易な表現で書かれた児童に親しみのある短めの物語を用いる。文字は音声による内容理解の補助となる程度に扱う。飽きさせず繰り返し聞かせるためには，聞く活動に変化を持たせ，「英語を聞いて内容が理解できた」という体験を大切にする。 ○物語を聞かせる前に，絵や題名からどのような物語か想起させたり，前回の内容を思い出させる。 ○聞くポイントを示す等，目的を持った聞かせ方を行う。 指示例）「場面や内容を考えながら聞いてみましょう」

	○最初は音声に集中して聞くように，文字のない画面を見せ，繰り返し聞かせる時には文字のある画面を見せる等，聞く活動に変化を持たせる。 ○児童が少しでも英語の音を捉えたり，内容を理解したりしていれば，しっかり褒めて「聞く」活動への意欲を高める。発音等は過度に正さないようにする。
「話す」活動（シャドーイング）	読み聞かせ教材から，児童に身近で長くないセンテンスを取り上げる。何度か聞かせてから，聞こえたように（児童なりに）発話させ，「ネイティブのように発話できた」という体験を大切にする。 ○取り上げるセンテンスの内容を絵から推測させる。 ○すぐに発話させるのではなく，文字を提示しながら音声を繰り返し聞かせる。 ○学級担任がシャドーイングのやり方について説明し，モデルを示す。 ○シャドーイングを行う際には，少しでも声に出せるように指示し，励ます。 指示例）「聞こえた最初の部分だけでもまねして言ってみましょう」「聞こえたようにつぶやいてみましょう」 ○ある程度シャドーイングが行えれば，場面の状況に合ったジェスチャーや表情を加えて行うように指示する。 指示例）「登場人物になったつもりで動作をつけてまねてみましょう」 ○少しでも声に出せていれば，しっかり褒めて「話す」活動への意欲を高める。発音等は過度に正さないようにする。
「書く」活動（ペンマンシップ）	児童に過度の負担とならないように，『英語ノート』で取り扱われている単語や児童に身近な単語を用いる。音声とともに文字の形や単語に慣れ親しませ，「英語を書けた」という体験を大切にする。 ○音声との関連をもたせるため，取り上げた単語について，まず指導者が絵と音声を示し，音声にしっかり慣れ親しませてから「書く」活動を行う。「書く」活動は，正確さや定着を目的とするのではなく，文字に触れる程度にとどめる。 ○児童に過度の負担とならないように段階的に指導する。まず学級担任が単語を書いて見せ，次に児童になぞり書き（黒文字・破線文字）をさせる。その後，写し書きをさせることで文字の形に慣れ親しませる。 ○児童の興味・関心を高めるために，「単語さがしゲーム」等のゲーム性のある活動を行う。まず，学級担任が単語の探し方を示してから，活動に取り組ませる。

（３）継続研究における成果と課題について

本研究では，昨年度はアニメーションの ALT を，今年度は実写版の ALT を登場させ，学級担任と ALT との T･T に近い授業形態を創出する授業モデルを構築することができた。この「実写版 ALT 動画」を活用した授業モデルは，学級担任の外国語活動への不安や負担を軽減するだけでなく，学級担任主導で行う外国語活動の指導のモデルとなったと考える。

音読活動（「読み聞かせ」「シャドーイング」）は，児童にとって，より多くの英語の音声を「聞く」機会となった。この活動を通して，児童は「聞く」習慣を身に付けるとともに，英語特有のリズムやイントネーションに慣れ親しむことに効果があったといえる。本研究では，オリジナル ICT 教材を用いたが，学級担任や ALT が絵本などを用いて音読活動を行うなど，「聞く」活動を充実させるための実践例を示すことができたと考える。

さらに，中学校との円滑な接続を目的に「読む」・「書く」活動の効果的な導入の方法についても検証を重ねてきた。その結果，音声理解の補助となる文字提示や，文字を書いたりなぞったりする活動を通して，児童は負担なく文字に触れ，文字への興

味・関心を高めることがわかった。この文字導入が，中学校での英語学習における「読むこと」「書くこと」にスムーズにつながっていくものと考える。しかし，検証授業において，『英語ノート』に基づいた活動と音読活動に加えて，ペンマンシップ活動を全ての授業に組み入れることは時間的に困難であった。よって，例えば単元の第１時から第３時の導入時に音読活動を行い，第４時にペンマンシップ活動を行うなど，指導計画の検討が必要である。

評価の方法については，自己評価，相互評価，指導者による評価の３つの評価方法を検証し効果を測ることができた。しかしながら，指導者による評価においては課題も残された。今後，児童の具体的な姿を評価する規準・基準，評価の場面や方法について，さらに研究が必要である。

謝辞

本研究を行うにあたり，京都外国語大学 教授 石川保茂 氏，帝塚山学院大学 専任講師 近藤睦美 氏には，研究の方向性や関連する研究等について多数のご助言やご示唆をいただきました。検証授業実施においては，白浜町及び串本町教育委員会並びに研究協力校の皆様には，多大なご協力とご理解をいただきました。また，「実写版 ALT 動画」等の作成においては，田辺市教育委員会及び田辺市外国語指導助手 Ms. Cynthia Alice White にご協力いただきました。ここに記して，深く感謝いたします。

＜引用文献＞

＊１　岡秀夫・金森強編『小学校英語教育の進め方　改訂版　－「ことばの教育」として－』p. 118　成美堂（2009）

＊２　文部科学省『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』 p. 7（2008）

＊３　兼重昇・直山木綿子編著『小学校新学習指導要領の展開』 p. 40 明治図書（2008）

＜参考文献＞

・文部省『小学校学習指導要領』(1998)

・中村典生「小学校英語への文字導入についての考察」『言葉の絆』(卯城祐司・太田一昭・太田聡・滝沢直宏・田中伸一・西田光一・山田英二編） pp. 587-601 開拓社（2006）

・中村典生「小学校英語における文字導入の問題点」『岐阜市立女子短期大学研究紀要第55輯』(2006)

・中村典生・林田宏一「語彙アンケートから見た日本・韓国の小学生の語彙習得の傾向」『小学校英語教育学会紀要』第８号 pp. 89-96（2008）

・文部科学省『小学校学習指導要領』(2008)

・文部科学省『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』(2008)

・兼重昇・直山木綿子編著『小学校新学習指導要領の展開』 明治図書(2008)

・大城賢・直山木綿子編著『小学校学習指導要領の解説と展開　外国語活動編　Ｑ＆Ａと授業改善のポイント・展開例』 教育出版(2008)

・小学校外国語活動研究チーム「『英語ノート』に基づく ICT 教材を用いた小学校外国語（英語）活動に関する実証的研究」『和歌山県教育センター学びの丘研究紀要(2008)』

・岡秀夫・金森強編『小学校英語教育の進め方　改訂版　－「ことばの教育」として－』 成美堂(2009)

・文部科学省『英語ノート１・２』(2009)

・文部科学省『英語ノート１・２指導資料』(2009)

・直山木綿子編著『小学校　新学習指導要領の授業　外国語活動実践事例集Ｉ』(2009)

・文部科学省『小学校外国語活動　研修ガイドブック』(2009)

・文部科学省『平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について』(2009)

・全国都道府県教育長会議2008年度研究報告書『新学習指導要領の趣旨の徹底に向けた取組と小学校段階における外国語活動必修化への取組について』(2009)

・ベネッセ教育研究開発センター『第１回中学校英語に関する基本調査（生徒調査)』速報版(2009)